芭蕉翁附合集詳註

下

芭蕉翁附合集評注下巻

各月のもやう　まふ　信ひ

一ふでもなき　紀　梨の　切　扣

玉味噌の仕法ふかゝる　秋　北風

まふかゝ　ふとゝ　ふふ　一ふでもなき　紀　とゝの

しらひちまぐ　ふひ　あふ　さぐ　をつみさ

る　なり　後の白ろを　を　ぬ　ぐ　ゝ　法　神　し

玉味噌の仕法と　枕　詞のやゝにひらけさる

さてかハち　仏　諧　なり　附　ぐ　ろ　おの　ろ　面　なろ

すべきさら

大倉文庫

けゝ宿をまめいて通る能の能
まゝ田らぬりて　夕立れ風
平目なる石を蒔ゝる引水場
さゞめれ白鷺町はづれの家と見ゝる附合
なり後の白もさゝぐる田家れやゝさと見て
風呂場河原ごいふものもなく井戸端
ふくり水さゝるゝてろやさきけまえ
糸売といへば盗もゆるしぬ里
ふよつと秋日ふ　むらふ　横雲
苔白ハぬけ糸売といひゝ歌見才ふもかれ

くぬけ出る時ひそふ砂用の金など盗むる
何里よりらぬるすあれど糸売といへば人もゆる
さゝすありねなるけゝゆふれるくあるる
なり後白ハさぐふ家をもぬけ出ゝ旅千
かりなるさまえ
四五人通る　僧　長玉寺里
彩色町のこどもの乃　能古能
苔白春乃日　北長玉なるふ四五人連の美
法泊のゝ鳥ゆくふを左ふらんの町と見ゝ
苔物の能も色てなふらんのこどもの能乃

稽古をする内まなびつけるこの苔をいふこ
とばのをこしめぢまゝなれどやはらかなふ
てきしたる俳諧ありさらのつけごろ
ふうく歌味をこし春色目前

はち壺(ツボ子)の里下してハ泪ぐみ

塗た(ぬ)をよりおの出し入れ

苔白内内壺の親乃もとよ来くえづゝへ乃
うたことでもかゝり出くわが家のをつし
内ふ涙ぐむやゝをたり後白塗くぬハ(手)
内壺のまた乃具をなるべし(ぬ)れの塗やゝ(蒔)



俗のやうをなどめなれぎつくく古風め
たくる、まことふえづゝへをる人の乃具こ
かのおよりいろくのもの出しいれくもの
ぐゝりをする内まゝ(非)味(ゲン)ふはふをたを
何となき白のやゝをなれどふくく心を用ひ
たるつけ合なりふくく心をつくべし
有明の七ツ起たなる 菜 碗に
ひさご乃れをつけわゝたり
ぬゝく起出くひ内ぐふれつける老人な
どの風情なるむり

小僧のくちふにおづくへきは
やすくと矢(ヤス)の河原(カハラ)にあらず
やきくやきくいひうけくり人のとある
をもいとハぞ赤先ふ川をかちわたりきふ
赤蜻(アカトンボ)のやくきて小僧のちまふつけたるなり
かならずにおづくきるふ僧あるべしをうきゝ附
合たゝり
萱草(カヤリグサ)の葉もかりらぬ恋をしく
秋たつ蟬乃　の里
花の匂恋を菓ふたくへたるをうけく恋句を

鞘ふたとくせつなる情をのぶくり
ふぶ小てまきた記　萱草乃恋
蕣(アサガホ)の花乃ふ除ふ　咲うめく
萱草ふ恋をまぐきくしくとふをゝ
なる附句ハそのはふくく萱ふ枝ぐくの
花をにふハきくりかるつけ句ハにふひとい
ひてさぐふどをつけるといふのもなくた
ぼつらなきやくにつけるものゝ仕拵つねふ
ものくすゝりのぶり学のぶべし
から臼も病人にのれバかさぬく

たゞけやさ〳〵
なりたる附合なり　おなじ病人のゐるゐくか
ら白をかりゐ来るふふさとわゆをいふけま
なり　惣白ハ髪ゆひのひろ〳〵けくやきて
ゐるやゝさてさいふ病人ゐるゐをさゐる
との附合なり
多〳〵玉の緒ふもの思ひまさて
けハ〳〵どもよそ〳〵ども男かつゐそず
さいらの附白公羽ゐらで逢うつゐ侍だた
かゝ思ひの玄をよくのべるものゝふと金

見初ゝよりかなふまじき玄とハさゐ侍なから
そなゝつゐもわさゝ小ぜさゞる〳〵ふゐ〳〵ふ玉の白思
ひかけぞもたゞめ〳〵出ゐひものいひたる緒
よりあはゝ〳〵思ひみつびがゝきおのひなゐゐる
ゐ里ちきどもゝとよゐゐゝ思ひゐ〳〵いろく
とけハひよそ〳〵ども男ハさゐぬ新ふつ小なきさ
さゐろゐるをゝちゐらあるゝ公ねハさゝふ玄
の白ようゐゐりゝすむべゐゐ玄白といへ
だいづ小もゝ〳〵たゞゐらば人意のゐなぶふ
ふゐらぞすべ〳〵玄白ハさゐ侍ふゝ心

をつくだたるすゑ
田畠の稲をゝ
風ひえろむる　牛のゝ乃旅
附合ハたぐろの切ふるく牛のゝををきく
他国へ蓑よゆくけまはたのさぐさ
尼さでハ人の　何ふ　なるべき
扇　風や吹　起ちかい笑ぬ
さ小ハ二句とも去ぬやて学人のいひ出づべき
るふほらだ苔句人ハ尼るてゝろけれい
つまでも生ホバ何のさまゝろむといふゝろ



をろゝふもちゝくたもてよハもゝ人の尼るゝ
なたものならバ何のなるべたと滑稽をの
べゝるゝ人ハ四十よたらで尼むゝそめやそうな
尼さと兼ぬもいつり余出きハ船多ゝとも
いひゝとゝろくゝ人のもゝ生るゝを船ハ
乃人者のさろ乃なり後句又弄ぬのつけ
合ゝゝ伊乃翁の人を絵るゝ松なりれ
不よその人尼ぎハ人のといへる苔句ならバ
釋教速懐乃たぐひをゝそ思ひするべきを
扇風やとハたゝ手ゝる兼たむゝゝ附合も社理

ならぬ晩の月をみる人の秋風ふく吹おとされぬ
かいなをとゝ屠かくるを見てるよりたまゝりこゝろ
さばうるもいとらぬ(フカヒ)ふの思(ギ)儀なりぬ
ゝとゝはさで

十六夜もたなびく名ふ月の
まゝろをかくさて　お蓑の秋

お白ハ名月の歌も十六夜もまゝりくゝ因
ど名ふよかつゝ月を見ゝとゝいふすゝ
俗白ハ商人のならハをふ利成むさぶる心を
かくゝくゝ蓑ゝまきゝこゆれどけよハほらぶ心



ほるゝ拍蓑の杉のがえをぞゝろをかくゝくゝ
とつねれ拍蓑ゝたなゝゝゝゝるといふまゝろ蓑
らむらけるもいまぶ杉ぶやるたらね形ふ試み
ちのたゝをふとゝふべゝとまれゝくまれその名
ふふふぶものなど蓑人と見るべゝ
物ふゝり　拂ふとものは　松明
五月までふ袖のわゝゝもぬきほ(ぞ)
けをゝるゝのなるほどや
盃成ゝゝらふ史　元巻ゝ
年蓑ひとり日往ゝむ秋

いろなる附句をとらむはうりがく
波ハかさてみのの富士を新りさて
富嶽ろく汐干をぐらけいう能
おの句波よ富士のくつめくかさてある新のく
ごくこいふ句恠句汐干見の家ふいう能をさて
ゆる浦をの家
城小の新雪えまく蕎ぬぎく
たきく火を吹 陸つさが妻
おの句ハ家ふかつめくい蕎をぬげバ城北の初
雪えふしとと恠句ハ城をのりきと 曉

はさてぐくをてうくいひのぐくり
黒木ふさてぐる谷かげのふ屋
ぐ脱と身をやまりをむ初思ひ
赤多ぐくもいうたらむ注妻とたりてるぬを
やまりをむをどを初思ひおる谷うげのふ屋れ
御まさ新ハ思本くもふふさぐりたら
むをくかりぬぐき始とう
水のいハやふ 佛 さざみく
ふる夏まさて該(ス)傍の通(ワキユ)風れ熱(ニユ)うへり
うの所くりれりく さ

聳入ふ菜葉まもたのゞ名を知て
玄に古風乃 待る 夏 爺

菜葉が聳入ふたのゞ名を知るを夏爺
のよぶりと見てゆげよもみちのくわゝゆまで
古風の玄ハ何のるべき
付平もをゝゝそぐ〻 待(シヅ) の子

此里ふもちつゝへたる 布 袴(ばかま)
まゝ〻たゞ附合なるゞをゝさ白くもちつゝ
へたる布袴ハむゝ 何ゞ 左昂ゞ見ゝふな
らむ



杉ふしハ塩屋まぐ まゆ おもらひ
乱(ろん)香 ゝ のちハしらぬ 連 号

此浦ふ名言ゝたゝゝくいゝるもゆゑ何る人
の落ぶ杉ゝる左ゝ ゝ ゝ見ゆゝゞたゞいつゝり
ねゞゝ世をまて何そびゆゝる左ゝゞ名をゝふ
べくもゝらゞ杉ゝハ塩屋まぐも来て おも
らふをゝこ 後白ゝくハかのをゝこれものかゝり
ゝる故きけバ古ゝゝゝゝゞもゝくゝゝえてかゝる
めゝゞ 左ゝより後ハ連号もしらゞゞどいふに
けてゝこそ左ゝものゝ おもらひ左ゝとつけゝ

はものかりそめいつの代乃乱のくちぞ
雪乃ふさまを待しる春風
さの石れとを浮世ふまとめて
高野雲水の匠さ解しがゝ
文結のかつれるかゝる衣うづき
人の情を保ゝふ紫ゝく
こも又さとりがゝ
陀袋ちがさ本曽の椋の実
月の宿亭を待うづき拾出よ
お匂陀袋ハ陀袋乃袋ちり陀袋といふこ

とハいれかさるかどハ陀の陀を思し
く陀袋ともつゝひ来りかゝるゆえかさ
るハこのむるよハ所ら陀匂えハ行れ乃
身の上ふて陀陀袋の中より木曽の椋の
實をとり出を体ちまえ体匂お意かし
唐人の志れぬ云ふ〳〵ふなづきて
志ばらく俗年一分をかもる僧
黄檗流かどの僧乃子面ゆりく志ばらく
囲俗しるが唐音をよくしゝ体かに
体ちを唐人かなどちまる時ふ出ハひれる

いふ附合なるむらはされのれが弦（ミヒ）俳（ドキ）よや

赤きかしらを垂るる柳

花さけり靜（シヅカ）の舞なかるみよて

菖蒲のこゝろハ里のゑ乃赤がしらを垂れの

撫るといふ句なれど後句よてハ赤きかしらハ

蓑の垂ぐさふとゝめ垂るかくつけるものと

尺迄靜の舞なるのゝ花の後乃

花の

垂つけゝ餅くふどのゝ枕

垂でゝとゝぐ体草乃引垂ぐ

菖蒲ハ家ふ所ハ軒ふもる雨を弦ふ垂れ

の葉ふもるといてる奇のこゝ乃なふくみゝく餅ふ

垂つけゝくふどの弦といふこゝろをみて垂

ほ弦のこゝきゝのをいひつけゝり

やれ　垂なふ　いる　枕　ゑ

四ゝ折の蒲團に臥ゝ　涙ゝ

苔句を意のよび牛と見て意なつけゝる之古

ルも俗乃俗のゝ意句なれバさもつづるまでよ

垂句なり四ゝ折乃蒲團の上ふそつとれゝく涙

垂るさぐゝえもいひ艶なるべし古ハ苔句

の梅などにたぐへたるこころ

花さる乃宗と見えるちよの下

畑き井　清をのぐるゆ能

さゝえたる陣乃春を

のゝ石ちらさて　伊丹洗白

瑞小　雅亭　ゆてゝの　まゝ　ゞへ

産千　伊丹清白のさをさをさえてのゝ

ちらさるハ必定なる宗とをく産業

の喜ぶへさるさをつけゝ

見しられて迎付なりし本首のる士

脱入さるよりさやゆる子引

本首のるさふ見しらる人伝脱入さるるよ

里ゆる引徐宗なるべしさゝ附合か

くのあくよく芳白の位をさむべし

草赤さ百石元れ門ゞ海へ

宗ゝ小夏ゝ宗ゝの坊方

さゝぐよ芳白の人ゞなるべし白之八解さ

彩に及ばさ

千おつきやる結金の教

多拭のまぎれゝをひつのり

赤白つねの不安ぶぶで恨白れのぶが鶴亀をまた
らぶ千相つけるはハろれ者ふハのらぶ諸人花
などの形と見くつけるえ内てハを拭きゆふ
屋の風名よりまぎぶるをいひつのるたま

蕉翁句集 俳諧千句 松島のさなぶうね

編 紀行 入るハ 何ゆえ

翁の白ぶぶ内のえ縁ふ

のく 折 狩乃 かつる 芋 細

俳のるが 結恋 智くふ 秋乃 風

くぶぶれど翁の意れ白かへきぐきめでたしま
きとふつくく寄ならぶるふ―のく折狩
といふ芋白ふ住ゝ恋の白を思ひつむさぶ縁
のるといふるて松下ふくかなひくり
手作りの酒乃幸ゝも付ふ星
月を見ゝ雪と見人ぬ鷺馬の市

古俳句鑑賞

物見を拾のぬ―ふ折くれて
赤をさゝふふ名城君ハえらぶや
芋白たぐ人ならぬ人の思べるるのなりて

おなじくりにかくれゐると見てつけこゝ
ろゝなるむらけれバ雨のぬるゝ物をれを
うちゝかくゝわげたをきたゝる名ハたゝるまろとそ
ゝ
ゝ
ひ一夫ハまゝらぢやとゝるにけてハ伊
が一夫のゆらされぐゝみまゝ　まさてよあぐ
かゝらふけまゝかゝまでハとゝらぢやとゝもやゝぬ
ぢきを旦愧（カツハギ）且笑（カツワラ）

流れ木一たつゝる　恵水のれ

門（ゐなか）にさゝれ著たゝらん　俳連の内
ふ海（ゐなか）水をいむハ恋ゝるてきはゝらむゝとかく



つけゝるゝゝ
子規（ホトトギス）痩てゝ　ゝふ　はつゝらむ

わが　おもひ　浮世　一人

おもひさゝる者ハ糸一人ゝと思ゝるハゝへての
人の情なり　ゝすゝも糸のゝもの思ふゝれ
わくゝよりゝ　ゝ白ハ一人情をつくけぐれ
ば白ふゝらぢとゝるべし　附ごゝろハほを
ゝぎたの痩ゝ　ゝはくゝなくゝとゝふを恋ふたゝへて
したり

ひ　恋をいハむゝとゝれバ　吃（ドモリ）ゝ

うたれてくかへる中の戸は竹簀
立をいハむとさしれバ吹たゝめとハをうた
白なる城やたしくうちはゞりたる不の立
ときをふたゝくらきぬ　たゞ竹屋ふくれて
かゝふとうふをうしこを俳くり
火をたけバ谷の泡まもゝごもり
ふもも羊ふ　俳さて　明れ
はゝのまゝ
ぬふのをたる　筆の　和さは
入立てはまりよりめく　花は奥



苔白いちにも古風なる不と見くよりのとハ
つけるならあ接白のこゝろハ中くふ人里
ゆくなりふりはまりよ山の奥を見ねて
といふ奇のこゝろ有
鄙簟の大ちる石だゝり茶屋
風ふふられくはすれ市人
はるもも長安ハ見名利の地
云ゝだゝりも入るべき鄙簟を市の茶
おと見かつ孤ふ風ふふられくとはらひ
たるこのちの白ハたゞ市人といふすりも

安の市を思ひをたりもろ安ハからこのみやこなりいづくすもはれ都の繁栄さて
はは地ハ人性(ハリ)繁(ハム)栄(クム)ゆ名利のふくつの
くふ〜はものこもろ安の繁栄詰ふれるく
見ゆ
醫のれ不れころ目ゞる不〜れ
いろ〜とはをの文ふたち出く
れのれも醫を業とさふものこらまことふ
醫乃れ不れころ自ゞる不〜れいそらと
はをの文ふたち出ふむべく



ひとりせハやく
けり里ふ古きもろ番乃名をつくへ
里ふもなどいつるものむらより代く田ゞ名
をつけるゆ世ふれるくはるゆ有り里ふてハ
人ふもられれれバおるゆ赤ハ頼ふるのこゆまも
でもせハやくとの俗ゞろまや
ゆこ弦たろもぬ面乃はけゞの
きぬゞくやはまりゆゞそくなてやろふ
ゆのはろゞれもゆこ弦たろもぬていふをみゞびて
かてる人と見くきぬゞくとつける奇くぬく

かゞそくてやらむハわりなるべ
風ひきあふ さ苗のうつくし
ゑもつゝぎ豆の古 猪もさべり来ぬ
風ひきてたいもまぬなるべ こゝからさて
ぐふるのをつけたる一鉢之
柚いろ〳〵 たゝ 船 なりり
月と花はなの高船をゆるく
ふれもその不之
波小戸の釣寺付る春の末
見をハ淋しき 春の 狭ゝり

破れ戸といふを農家の内をゝ〳〵つけな
ゐまをゐふるたゝろなし
家なくて脚(サ)ふつゝむ十寸(スヽカミ)袋
もの思ひある 仲子のおいひ
さいめくいなる 附ぞろといふすハなけ
まどおぐろけるゝ ゆゝしき白人十寸袋の
家なたハ仲子のお思ひなるべ
人をゝくいまぐ出産の白ひる
幼 妖ふ古もる 童乃 庁 偶
ゝれハ二白ゝも源氏お伝の面影なり

ほそぎたる竹の間なる流れ中ふ

垣穂のけしげ草ハこがれて

こきちらすかのみのひひたるをたづねいでら

をつけそりともみえぬがみなくよくつきてえ

もいりたるかつしゝ竹の間なる流れ中ハあもい

たくふけて隔てぐたもなくらむ垣のけ

げの草ものもらむ

間やにくふわづらふ妹が夕なぐめ

あのそこハたゞ泊てむぞ

間やよくハ間なにくまてにくるところなんど

山白なるどもくハふくるあるろよハ間ならば移く

間きさぐさをいへりこの間やにくの世ハたゞ

けなる人なる思ひ知ゆく及ばぬ立なるるす成

走りて思ひきるすならぬ事を見くハ

かなしゝ山を見てハなげくなるべしさべて

ものを思ふ人ハタなぐめさるものゝ恋白ものを

泊なてむといてなれきしろたゝ泊つけぐろ

ゝきぐよろの人なつけるなり

月のうハ乃そるくゝ消さふ

沾も まをく 鞍ふ 居ぬぶり

はつ子句ぬの係く敬はまべ〜消ちゝたと
いつるふ居ねぶりとひぐらをたるなくそのぬ
をいはむとまほふにぬ〜〜いつるゆるさいだ
秋の田をからをぬそるのちして
ちい〜〜なぐらみなはゆよまる
おの句地搖田地なごのそるのえいづれもみな
農家の者どまるなればみなしらぬものが
ちなるふかまく〜〜しゆる人ふさいゝゆふ
なるちまく〜俳状なごのみなるべ
いう矣〜〜尾 庭の木茱萸



馬 まうまるまの痩てかひなた
木茱萸のまの乃病がちなるといふをゝみの俳
合なりり人情世能をつくりゝいふべ〜木茱
萸なれば人参も能膳も自出なるべきをと
うく地をまの痩をまろふとうふまろかに
ふくのり
花の沈徳茱萸まのゆ
ゆふ〜をくつ〜〜 腥さに
ほまくろはる俳合之徳茱萸のゆ
やまの〜といふ人ハまくふ徳茱萸のゆ

人ふはらだたぬ花とつみ霞ふつかくらるれ
はゆく人をれば春はもとより仏人はるべくもはら
ぞけれバ田中しらひてはハ踏らるべしろれ
ハもはるを諸美まおりとつみ苔白を月と本
しくはゆとつけ体ハ俗の名花人成なるを
はと

何ゝも苦とのうちハ志づるなり
里見えゆく牛の見ふく
人のようくしる白ハれバ祥きば
美蓉の花はだらくとちれ

吸おハ先出ゝけれしさらせむる
苔白芙蓉の花乃ちる庭ハ多くなるとてハは
らじと吸おハ乃向上なるるをつみるなり
せむるハ西園の名産海苔花名なり
片しゝ木つきたれ月の紙枝
苔なぐら花ハ美ふるを水神
おえなし
次ともしハ芙蓉ハのびは峯のち
ほとゝぎすみなを時 仕義なり
保林遊寺趣

傳をかりて
うき人城柵穀垣よるまくらをむ
古ものがたりに侍りかねてたゞ月見つゝ
よしを契りをまく思ひ車ふうちのりひろ
うふうの正ゆくふなかの車のまれ思ひ出ふ
濃の宗八川うくしれくまこなさもろれと
りて出むるへたれどきれ思ひは多きれば月
をいるべたふなくていぐせむと思ひわづらひて
柵穀垣より入れたるえたるる垣八井の垣とも
柴の垣とも書きをたゝんでりがこき柵

穀垣をゝづらをゝくゝ意のせつなる時を文
たりかつうきを人といつすふよくひがきり
まゝとゝ公箱の意句よりてたちらふ
人意の及ぶべたふふならをそるむべしはゝぐ
ゝし
まゝ天ふゝ月の影ぼうみ
俳 水の秋乃比ゝれ初ゝ
はごろ付合ふまりてはまゝゝふ正風乃
ゝ面目を写されたる時なれば解ゝるも
れそれ何りおの句もゝとよゝでれゝる句ふ

て一句つゝきとゝてぬゝとき天ゝいふる
み字ゝとゝふちゝらゝ河りかゝるつゝの紀伊子
をゝけゝく澂水の秋とつけゝる古れを白のひ
つりゝとゝつゝふ白えハ澂水の秋ハ芒れ毛おふ
時とゝけゝふをゝ河のハゝをゝるえげゝもゝ的ゝゝの宮ゝ
ろゝゝくゝゝれてゝ澂上ふ有ゝ的の月乃ゝゝをけゝゝ
らバ比れの松ハゝくゝゝ色らむ西中ゝ

布子 著 習ふ 風のゆゝれ

押 会ゝく羅てハ又ゝつ かり 松

布子 袷の松ゝ的ゝれゝ紀ゝろれなど吹てゆふ

ゝれの古ゝしふ者ゝ沢よゝ比ゝ人連の旅ゝる
しいまゝゆゝゝれ家ゝ鳥バ松もゝゝれ羅てハ紀松
てハ羅るけゝゝ的ゝき袖えまゝゝよ布子ふ習ふ
沢の河らひぬとゝふもゝる彩らし

ゆまむらふ蛙ゝハ床 ゆふまゝれ

蘿の茅ゝりに刈 ゆりけゝ

芒の白を女の古ゝゝ見ゝゝつけゝり竹と
きゝゝく蔬乃芒ゝり出ゝるが蛙を松それて
行竹ゆりけゝ るけまゝるゝめゝ れど
ゝれハ庭ゝろよ河れ ゝよ松てゝくべ

たるまゝ ほどゝぎすなどたりげれよりつのこと
能登の七尾 七尾は 名ハ住うた
魚の骨 高りぐるまでの 花をこて
ちるも公の ちるを名高 附合なり 芭句
もよ 花句 能登の七尾乃名ハいろ も住うり
ちむ ちるふ ふふ 乃景 すゝ 雪も高く これ
もふ ちむ されど ふ ふ て 魚の多き ふな
れ かく つ ゝ り 意味 ふ ふ り い ふ 行
ちる も ふ 句 の ぬ を つ く ち る す あ ゝ ハ ば れ
菜 を 作 ― れ く

立ちり 屏風 たを 女子ども
河原ハ 休の 簀 貴 僧し た
河原の かゝ ひ ふ 屏風 引 ま り ― たる を 女子 ど
ものけ と つ き て 引 た を ― たる ち ぐ ゝ 見 た る
附合なり
僧 や し 寺 く に か へ れ り
猿 高 の 猿 と 世 を 種 る 秋 の 月
ち ル ハ た ぐ ひ よ ― た る 附合 なり 僧 も 寺 ふ ゆ り
猿 高 も 家 に 種 る 之 一 句 甚 高 閑 感 慨 ふ ま り
あり

五ゝ本生木つけるる　澁

ロニ　伝ふ　ふゝよぐん　笠　ふこのた

　　ゐ　伝のけしきゝゆ

でつちが　芋のふ　水とぶ　りり

戸傳子も　莖がと　ひの　麦　屋敷

芋白ハん　水が　白ふて　ちゞめ　蕈とぶ　りり

いふ白ちゝ　を　蕈のるもゝ　さべたやと

公ゐたづねるに　ゐむ　ゝゐ　ちゞれも　さば

ゞたるすゐハゐら　ぞといれけるふよりて　蕈

を水ふかへちゝと　ゝゝ　ゝ　来　ゐに　見　ゝゝ　ゝ

け合ハちゞゝの　ゐ　ふ　ちゝ

さゝゝゝと　芋　鞠　を　伝る　月　夜　ぶ

蕈　を　ふるひふ　起　秋

ちゝも　名　喜　ゝ　附　白ふて　信　ふ　ゐ　凡　伝　偖　乃

さ　的　ちゝり　芋　白ハと　ゝゝと　芋　鞠　を　つゝりね

ほふゝちの　ゐる　ゞ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

つゝ　ゐ　男　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　秋　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝゝ　見　ゐ

ゆゞみゝゝ　蓋　の　ゐ　り　ぬ　ま　桂

芋　ゝ　ゐ　ふ　ゝ　ゞ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

内の道具乃或ハゆげゝ或ハ蓋の内ハぬゝ見ー
ちゝ乃やゝきいろゝも位色の人と見てゐるよゝ感ふ
も位つゝ出てのいふかゝとけ感も出ゝ
ぬゝ出るまゝゝれ風姿なるべし此句も前
の名たゝき俳会なり
ちまゝ〳〵ふふゝりめたる意をゝく
俗世の景ハゝなふ　小町　なる
お句ハさたゝくしたる人のちまゝふ意したる
後句特ゝて観音の情をたゝし　小町の景を
いひゝなぶ歓楽極りゝ哀情多し　お壮




いくばゝ時ゝ老をいゝむといへるおゝろゝ小町が
ちゝゝなら出とゝ何めゝくもとちゝゝならねゝも
おゝよたゝ世の中ふいひつゝへたる冥ふ小町
なゝいひゝのちハちゝ見まゝゝなりるゝ
をいふゝろゝ
はゝ　さゝとなしバ　廣き　板屋
多のひらふ風　這ふる　花の　伝
此句もまゝゝた西風の主面目之俳ゝろハ
何ゝゝの為ふるよゝ新なゝの多はひらふ風
這ゝゝ何ゝふちまゝ花の伝とゝふゝて元

面たくふ松茸よ春日のけしうるやう
さまざまも目前おのめし名人の白をつくれ
ろろふ写さぐんべうぞ

夕めしにかまさてごくへバ風葉る
金屯
の口ずをかいて氣味よし
前白いつもくゝ夕めしよハかまさごくふふ
て夕方よりさぐくなるといふをくく
いひたる之恢白農家と見て豆ハ孫の田仕事
ふ出ゝ夕ぐれふ湯ゆくかまさごくふとつけ
ふ之蛇の口ずといふよて田仕事もどりいち

しはし
遅せハしに
殿よりの飛
金屯と人ふ味多のやさち
諸侯の侍と見て函のかミより味と飛せ
よと度く供前の来ふ内まに恢白ちまに
入りの侍と見ていつも金屯の大ふ内ちれば
金屯と異名をつけられたる之侍ふ松ケ浦
はるゝ
何をゝるよも玉詠だりなり
花とちふ多ハ西会ゲ衣見く

俳の観想乃純之世の中ハ俳をゝ法とも家
だりの之俳もりも家諸乃やゝなるなりた
ものよりいふなくゝろふりて西会とハつけたは
なり俳句ハそゝゝえゝふまゝ之

俳の思ひよ　狂乃なく

夕月叔器の茅　松杜　庵る

茅ゝゝ乃之

惟よりゆの まやだていさだよき

加　茂の社ハよきやゝ乃之

洒落の句之茅句をか茂の俳ゝりは雖ゝみ



てその俳合なりゆ

ゆのやゝりの乃　無常　迅速

豆腐る書ゝるの多はたゝゝよ

茅句無常迅速ゝいふより俳の観あゝを松ゝ

ゝゝ世の中を俳ゝ乃とたちちゝぶむよりまゝ

ゝるは俳ゝ乃もなくゝゝ豆腐らむハたゝふゝ

かるべなゝの俳ゝる

片偶ふ出歯かゝえゝ蕎の月

二階の家ハたゝゝ乃たる　秋

俳ゝ乃立りゆ入りり家のたゝたる者ふ

夏すゝ家のすゝ ふうちかゝめていそぐさゝ
お庵の出歯をいとゝて行屋よかぐこねゝ
干いつの百よりハ二階の家ハ皆たちて行ゝ
やうなりとれ白ゝ人情世態ハ谷よりならぶ
て注ゝ云ゝむ

稲の葉延のちゝゝなき風
発心乃ちゝめる越る北茶山
苔白ハ何ごとも苔なき白苔を引ゝ
何のかゝといひ人の四ふ可めてふゝ
発心ゝ失東国のかゝを物引をむとてた



めゝく北茶山を越ゝふゝこの俳合之
紐結つくほ松がまいぢ
鼓重る三巣狗に秋の来て
保ゝさゝろ可るゝ可ゝさや
入辺ハ浦の海の夕百姓
中ふもせいの高き山ぶゝ
入辺の国の丹よひゝり目だちてせいの
さが山ぶゝなゝらむハめぢましかりぬべゝ
細ゝさゝぢより立つのめて
お思ふ多ふおくへとせつゝふく

芳の白きはいとゝ立いでたるさまぞよりつのり
て余さつるなるらひなれば人後白ハさてでは
萎ひぢのつきゆゝ山ともあめし立をのべ
くちまゞとおもひめぐらしたゞハ余も
何よりハとてもいきてとまるべくもあらねな
ど思ひたづめ侘ふる猶さえまりてきむ
はかいとゝしてらものゝさまゝのいるべた人
ハゝろなゝゝむりにさゝむるちまかあし
りゆぬ屋し
秋風の松をとゝはゞ法のさる

屋ゆくゝゝや　白子　あ　松

この又後白ハ　ふ後よむ花のちりた一多白
とつふ白なるがれのれとの三ととはとをけきに
一多白ふとゞまるるす百日のまりなのゝ白ふ
ふ松の色ふもゆきていせの国北業内よりし
りゝほゞつねふ此俳白を思ひ出ゝそゞろふ
古人の恵しうゆしがゝみ此白をよめばかの
ふを思ひ出てなつゝ起まふゝりことを出
そえつ白ハさゝえたる陰之
明月孔雀ぬる　屋の俳出

何よりも様のうつくしうてぞ何なる
ものとは知れぬ所のたをれ所ふかいうだりの何
れならむまことよう見も去も位ぬべしたゞ
様の何ぞとうもなくく其形(ミガイ)顔の上を表
まるハ蓮ハ何らでうつくしなるぞなかの何
れなるとの赤ろをトふふくみてたゞ赤
白ふかくらだ引たるして附たる白さ花
らを白のたこびとうよはこびをたらざれば
附合ふことし
蓮(ウヘモノ)ふ日をいとハ　侯かくち

終　見たきと泣たまひけり
何りのまくなれどうれ　を附白之
酒で元たれ何くまなるらむ
双六の目をのぞくまで蓮くり
苔白板も豆も飢ふして双六よふけゆねる
男よてもなからむとての附合之世よ何ぶき
けまの人なりをうし紀附合なり豆
中くふたるふ蓮れバ蓮をなし
わが名ハ里乃形ぶりものと
れのれが方をかくつくりなのくふなりて

世を驚かす人と見てつけるこ

月根くゝ　ふかわらは　月

花薄　何のまりはねけばうら枯て

芋白まことみはれとき白こたゞつくろはぞ

いひ出るめさむるだうりよりさ白こかるよき

白よハよわどさゞ成るこ白ふはらされがつけさ

るかひなこさ成恪白も又一さハまぐらはゆて

花落ハ何のまりすねくゆえふうら枯るといへ

れ形瓶つゆも芋白ふれうらびめでこさ附

今とゝゞ附ゞろハきこえたるまこ

一貫の銭むつうしと迄し量

醬者乃　せ味ハ飲む　ゑ　お

漢の和田園が疾で穀をぢるハ中醬をねさり

といへるかへさゞ　もよさゑ　おなるべしかくる

高麗の人一貫の銭ハむつうしからむ

つが係りうもこ　離うち来る

山伏を朝〻かけこ　家の芋

芋白のやゝれ世の中みゞれがり記はそれ

見〻つけるこつよく白をつくらびかくのあ

くはくまでもつよくるべし安宅といふ論の

中ふ山伏を斬たりとゝつるゝ所ゆゑの俳
もゝのるべ
ふ拍ぐ和るハ孔ふ所る所
たゝくめて所る　乃の大ハ
ちをる之たる
茗荷片岩に　縮さげゆく
ふ沼たつ池鯉　鮒の宿れ本俳市
紅ふ及ぶ
相國寺杜丹の花乃釜ふて
椀の蓋とは　蒔ふ味の子

おゐさの杜丹見ふれしたらびてゆのく
俵ふむりひちゝく椀のふとゝれバ蒔ふ味の
子ゝく斉藤たる料理たりとの俳合之
むこのし　味ふ　酸　鼎　注さふ
こゝぬぐハ青の　踊　の　泊　を見て
苔白いりたるむすしがゝりをしてり地市
を注をれむたらま　ほしゝれ接白ハ酸鼎
冥の所ふれ老どもが青ハ踊ふちゝ京のゆゝ、
いろゝ乃苔ゝたりてたハむれたるまに苔
つぶれ所ゝ乃ゝぶのゝ　ゝぬぐゝよも其さゝがゝて

ゆりしなるらむか
染ゑけの挑灯(テウチン)志めさて然れば
汐はしりうまれ　星川の　樗
苔白ハ嘘とノ、者をたちく染ゑけふ挑灯つけ
くゆきしと附ぐろハ女人をでる星川の
樗ふかゆく秋もゆえなれたるべ挑灯け
さそる星川ハ汐はしりうまれろしさつと吹
来るとの時分を知のをたるこ
塚のわらびの乃(モエ)萌る　石原
虚無僧(コモソウ)の師ふめぐりの春の末

ほきさろゆるぐやゝるきこえスハはきるす
なたがやゝるもきゝゆるまれくまれ解し
がゝ
胡蝶ふ濡(ヌレ)わりたる蓼(アイ)の花
よぶし絹ふかく　藍の粉
蓼の花はくろれを生ふれはまて
きゝれきはふ藍の粉乃ふほをぐさつ
くきりといふべ
月秋ふ紫を後ふ　探(モミ)出し
火ともしく佐ふてぐふ伏さち

さゝもたゞ村居のさゞく
今さやか 草田濃を美連立
春行の 槍ヶ 住もかくすく
おの白八侍のゝ乃美者どもゞ同じ草田濃を美
つれて 伺 俳 章墓などへゆくと見てむふ
よわ春行の 程れ見ゆるに見つけられじと
かゝるに 内まれ附合之芝亦人情世態
日八森く なるほ 二月 彩ね
紅花ハ伊勢の 牧 のとれ 紅く
おの白を伊勢の はゝ たるもてもめでた

紅花の 紅よりも 牧 赤をもるみや
みどりはさて 八田の柳 ハ柳 柱て
釜 菜 春めく 歩大豆の汁
艾色の 料理 給 拵 新くべし
児ハ まゝ なく 紅 蛍 の蓑
咲そめて 見ぶ たるよりも 猪さべり
おの白八日 枝 横川などいつ 不の 見ハ みぶ 男
なりは 後白八 たゞ ゆふひ ひぐさて けゝ 何
とゝ ゆだりの さくろもなしや
大文 蕨 ゝ ほつ おの 坂

皮肌のおもてくらふ音の月
かゝはるまゝ翁は見つけしやや
ちしほの門乃柱ふ寄かゝ
宮たゞ何くれば 壁下 入 虹
二句川ぐゝの家之汐八門の柱ふうちよせ虹
八壁ふうつるかゝる住居ころ何やしくれ
鄙 陝の窓なのさ宮に寄れて
ものくふうちれ 幌 の くゆ た
苔白まそなた宮八生不の何やげる宮
と見ておくふ何ゝゆゝ幌のたゆくゝさ

住居をつけたるゝ
待もとらでは やわられ乃星
るの音 傍 なたちのとゆゝふ
あれふゝの侍などの男命をかゝむゆ
て 傍 なゝもふ旅ふ松もむゝ時ゝの乃宝
ぢふ 欲 族 などか何ゝ何かてゝの船人
よりよくたちゝ久しぶりゝゝ男人を見る
ね何くれとかゝゆ出てともふ思ひ成のぶる百
もなくたや門おふ言ゆきゝゝ久傍 なゝもの
いぢとせわたつるゆゝまゝゝふ待もとらぐ

かねなくわらはとの附合なるべし

屋しをれば雪下にぬるゝ花の笠

初歳うろこえて春の糸ゑ

美美ごらげ糸ゑふみたなやうふ出立たるなわ

ちれば屋の多羅形もなくたハむれゆくちまこ

首の屋さまれ 軽舟 の句

初雪ふえ下の白を出しりる

おの白をねぶれ下の白と見さてかくハつれた

はら軽舟の句ふれつけて放されしまま

何れバゞ

森はは也も別れバ安た 徐の句

風雅 仕上し 沼のゝ 北才子

おハ徐のほゝゆふかもちてたゞめハそろさ

ざく徐の言れいぶせうゆしも 利きバ中く安

紀もの句めといふ句を詰人のちまと見て沼

のゝ北才子と僧 誓ふいひたるよやふく解

古屋子何さゞ

僧の 髭 利 は 童のゆゞれ

女房ゆ花なまめくなゆと踏歌て

をゝなへし おふ屋理童ゝいつ屋 遍照

の歌乃古へろも阿のゆやをみなへしハ女ようと
へたるいなくしたもの形りと路おろかよりさ
僧乃美者ハ心なるべしけて附会ハ多ふ
をみなへしと時それを阿ハせ祭るふとしてよ
なまめくとにハをたるう

月見おもしろし　旅の　ねゝ　来（シヤウヅリ）

ちまぐふ見　拾ふる　布　代え

色さりるわの月見なるどわ形と旅のねゝ来
ふてりしとちルバ英叔の俗づさひよちま
くの見拾ひしたるらむ

豆腐白ひくちるちへきうぬ里の花

鳥の菓もめて　住　阿らきて　庵

茶白豆腐さへあきる花之俗白多の菓古
めてなめて阿ルたる庵ふきむ人清ふう
らやむべきの地

はぐろ宮千　多を奏ルたる

みちくたのむたよりの　殘蘭

阿ルルなる附白きうみ出た二白の目に
きのがくめもつらほべらたりむう　殺波
ふ見ーき世阿わ文ハれるルひくりの　毋

けやうひづちなほふたらうらさへおろく
て秋夕の雅もたゝハたえぐ　なるよかの共へ
とかたの〳〵おぐえ〳〵るよえたえぐやゆ
めゝむをきわ〳〵めのをれとをたのみく多を
奏むとさるほよさんぐふさの秋波よて八又毋の
れもてぶせなれぐとつひふ宝の津ふハうれ
たるなりけれど毋のるれてろよかりてつ
ゆもえわされぐものの思ひさぐさたゆハれるよ
もーて毋ふたうりさりせバやと秋なゝたふ年
思ひとゞほれどけるべたたつきもなくてろ





なるぐ日をおろほふたまく後鹿のふハ奏
ふハろ〳〵の共なりてゆふれ〳〵けかざり
なく〳〵さまぐとうよかたつけく後鹿年
たのゝて新りけるるとそさハたゞゆゝりなふ
たたりぶれるなれどされよまむ人のねむり
をけまさのゝ
菜をづら人年ほぐこれ
ゆを咲て俺〳〵もなた　素（ヨステビト）づ
まづら世界を割〳〵く能さものを俗色巡
の僧は去りも多〳〵からぐ田地たのど秋咲て

人ふつくらをみづらも田舎などとりてたの
しめる人ふとりなりたる附合之
打解くとあやまちを送る歌羽
ふるもかづけくひとまとのまく
苔白くちつどひて病病弟を送るさ海之
接句ちれバ疫病も大やり農作もよろらぬ
まとて書もかづけたること
口ろろくと背中こしをの
打ひくいれぬ人を思ひうねぬ
苔白口ろろくと背中こしをの人を病ぶち



なる人と見て恋のもれ思ひ一なる人何日
もきてろふ不足なる身なれともうちかていれ
ぬ人ハやぶこあきかと城思ふならむとの附
合なり
ゆまぐれ煙竈なれとこく立海
泥うちかりて男ハまて女のぢれ
苔白ハゆまぐれまぐれ煙竈れとこく疫り
不ハ物乏と見てまて女のたりあれをつける
なり
富の八鳴ふ 寿 海ひて

傳奥ハ花すゝ月の　ちまぐに

宮の八嶋ふさぐふみちのくとつけて一句ハ

きこえたるまゝたゞんど月ハひとつゐ花ちま

ぐなるをいひかへくる新しこえ

おもかハ　俳ぐと宮ゑ　新出く

麻彦しくこゝ　ゆめやさちよ

庭蔭麻彦なぐまるよハれるく人いまる

あに宮すゝ新出ておゝをきくこの俳句

ならむらわろらくハろぐちまてだたるや

畠の中ゑ　ゐるる　稲妻



井ゑ　雑　遅　蒔て　夕月　新

さゝらハ句の俳ゑをよくゆハをたる俳句前

畠の中ゑ稲妻ハ　雑ハ井ゑ遅蒔てかく

柏ゑをゑねべ

ほゝぐぎゝ落くゐるて　あてわりゆ

煙の中ゑ　おろ　さて　ま　桶

けつけ宮俗の公的ゝ人を落きり落くゐ

とゝゑびたゑ毎ゝ　柏成つけるゝ　物の中に

とハゝぐめゝ人を　雑てまぐ　物のたゝ助ゝち

千又ゑの人成やく　ま桶をもてまるゝ

秋むはぎ世の中ゝのもほとゝぎすの声
くるらむ人猶恨なるのはくれはほとゝぎす
れ行たゝのはるものゝくるゝとゝぎすを
花出のたをたとゝふるのはバそのこゝろあき
にしも
梓弓矢の羽乃毛を加もをて
敷書をよ免まゝ秋　暁の声
梓弓ひくまなどのくゝ事ゆゝれど弓矢と
できたる俗ハはゆやなゝやよりなく
とも俗俗ハ敷なたるゝ花の白軍物と

見くゝる氏義貞などいふ大将の軍に出ぐらに
先仰社よ詣て思敵退治の願をたゝのはち
まゝ暁の一字大よちらはめ心成つくゝ
公立の増をさてる芦れくら枯
梅よ出くゝ仰ゝやせ世ハ花の体
さとゝくゝはまくゝの旅舞ゝ
まゝ雑をいくゝる事のうつくく
かゝゝ　恋の　彼やれもくた
二七美人恋を揺さるゝ
庶のさる たゝくゝ　春ふをぬゝ

ぬぎ捨も為さてだにめる 法師風
苔白麻のきたえ衣くすめハ墨もなく濃き
衣なるべし たゞ秋より後ハとつか白きなど
後白るてハゆえ有めく墨をぬこと見しに
ぬぎ捨たる人の丸みぐて法師風なるを
つけ〳〵の何のゆえといふるハなるれどたゞろ
の絞をぬぐめるしたる之
見まとれた業 種ハ 卯こけの苔
業を共ゝく白さて 和歌の学賢
の衣なり

硯 法度と 衣やせう 彩
歌の面 宮社方みく なぐ内まむ
苔白硯 何れば艶書 などやかくと硯も筆もさを
ぬ家るべし 後白かく はおがさた 衣ふ面くなぐ
内むかく もなく 鮮 たゞ硯の面内一ふりく
いとゞせむさべなる れば せめく ハ宮の方面て
面をさして なめと も なぐ内まむと ぬ思ふ
人の常情 公ひとゝ められをする
高〳〵ふ 水 硯 何げる 箱戸 梅
山 鳥のわらは く 沢ハ 衣づら なめ

苔白川戸樋つゝみて高きゝよ水をおとしてのぼる
ちまち山さ山家の屋ゝを見て山ゐるなばつけゝる
ゝらし一白佰となくけたゝくよ松白之
見ぬふりのをとこ人ふ恵をゝちらしりめ
さぐゝく半分かくさて　傘
苔白ゝちゝくのきけどもゞ人ゝちゝ契りねれ
ゝをを人ハゝちめなぐらゝちゝぬぐゝみして見
さぐゝ之悔白ハさてでよ見つけられゝく傘千
さぐゝをかゝしたるなり
息災（ソクサイ）なゝ下ゝに佰里

老たるハ松ハ蓋よりめ　おふかゝ海里
苔白きよりめ下ゝくのゝなれで下ゝくゝゝびゝ
たるゝハたゞ人ならゞと見て引抜て附た
老佰の松人附ゞ乃ハゆ恵佰めて下ゝくの恵
人の赤ゝなゞ引つれてやゞゝなゞさかゝよまる
めゝゝゝは老人をバゆはちれゝくちゝ屋のかま
でめしのゞをゝられてみゝとバなゞたまりる時下
くゝ乃ゝハゝゝやゝなゝと松ハをゝられしちまゝ
之ひゝく絆ゝバかくなゝらむゝまゝとハちまでチ
白をゝくものゝ佰ゝらゞ

松山の猨ハ嶽、瑤の咲わらゝめ
焙炉乃炭を　下さを　川　舟

松山の嶽川ふあ岩嶽瑤の咲わらゝ中を
焙炉れ炭をつゝてゝ舟之春ゝまさふ
画素ふ入焙炉の炭とハ画家も及ば
ふさてゝ　掘ゝ　佐ふ　他を
盆をふ画のさてろを　拭きバや
け附白ハ公の乃名白ゆゝさてふ人ふ贈矣
されバゝゝゝも及ばねどなふいバ　お白ふ画
掘ゝ他を佐ふ人ハまことの名人よハ伝ら



ぎたゞ浮世のすにゝとゝ　おくひ匝のゝて月ハ
を送ふゝめしゆめなさ人と見てつける
ちめつけゞろハさバゝゝれさて一句のゝろ
さてバ人意のなよふ伝らぎ
目のさめに先ふ入ハしてやめて
きゆる　ばゝめに　徳れさゆる
目ふ重瞳伝ふ人ハ大れとなるの笑なりゝ
うや人をおさるふも紀を第一とすゝゞさんど
お白ハかるむつゝしたるを思ひてつゝめた
ハ白ふハ伝らんだゞ　読よいふめ体目のゝちの

よるべものハ何るといふこゝろと恨白ハろの人
馬ふのゆて徒もさゝゐるだりゆふまこゞりゆ
いけまし さきぐさかる人なれバこそ目の
たゆふるゑハ てやるらめいとなりし
那子 智の市山 乃春 生 花
ちりぬめさぐめうえてほむまこども
苔白早春のりー 花よて世の中ハ春ふなめ
ちれども那智の市山ハ雪いとゐく市ちふ春の
さぐこもなし とふ白を ちりぬめふ見やめさ
はけまこ こふ附合ふや

熟 昭代 ふ地雪 弦 重 花 秋の哀
仕見 何こりの 古ふ屋 花月
草昭 袋ふ雪 弦川 ちめてゆく ふハ伏見何さ
りの古ふ屋 花門 ともさこ又ハ古ぐふそのさ
ふ屋が雪 弦 花 くゆくもさこ面いづれ竟
ちらむ月とふよけまでの古ろなし 古れを
那げこ月とふ何こふの 花とふもなのく
の月とふも回ドころろこちとのひ花よて
秋こも月こも 重ねべー
月さしと 花ーもとの 姿見

〻さてやうに書てもつる上筆の海
おの白思ひさうく〻いろ〻恋之姿もケハな
にゝゝせむとてゝちやりたれ内まなめなかい
まちなくも果よいらゝ海よりのふみをかくふさ成
ぐよ筆のふるゝ海とつる附合こゝまやゝよ
といつなハ一白のみてふらさゝろなり
弓と矢もはぐいく〻けよ接まづき
白紙書内〻出さて人屋のはハせめ
何ゝれちなる附白なりまぐをさなた人のけ
筆よめされて弓射るにその歌乃心をぐた



糸子のよ筆いらぐならむと人屋の何ハせめとり
内しのぞたて楽ぐるやゝさふつけるこふ紙
とつる二字みゝく涙も落ぬゝ
此阪ふ筆もらゝ海めいるく内
紙を楽〻人手何ハをぬ
ふれハ炭俵の附合ふゝさゝふ人のよく
れだえ紙海俵潜之おの白の人ぐらハ絵さ信
と夏〻負しく筆〻なぐらおぬく紙
も行俵ぐしく人るも何ハをぬやゝよやるれて
ろぐつるとの附合之

たつたゝ面ひ同じつらなる碁(モト)碁(デ)
さとゝハ面れ ふらぬ 月
苔白ハたつたゝ面ひたる高人の年久しく御
器(クバ)さしどもとより基まれ面れバ出世も
世ぞれなゞ 複なるこ恪白ハたゞ多くの子言
面ひといつるふつけるり面言なり
形ケ原 味噌ゑれよや原白河岩
ひくといひ出さ ハ代云の 子
此白ふつけく人ふさ原ふり 此苔ふれ阪
へといふふりて又ち代云といふふいゞならむ

と公苔ふたづねるふ公苔のいハくち代云よりたつたゝ
ふ原ふらバかへよもしかゞくハ此巻の見前一
ふくれけといりれ よるむべしふるべ
公苔の代諧をさゞけ原 河海(カハウミ)の面流(ヲモナガレ)を擇(エラ)バゞ
といハむらけ 合くりといれむよりとよといれな
といふも代諧の重云なり此ふを云らゞる
ものハたゞけ 合のうたりめて代諧の古姿に
ふらゞるふを云らゞ公苔のこのたとバを神(カミ)
記さべ一附云ハうゝ云たる巻之
猪(ヨモスガラ) 青 尼の 指 面を おさえ入り原

菎蒻（コムニヤク）だうり　徐れる名月

名月八人〳〵酒のこものゝひゝ〳〵敢なぐら月
をなぐめ酒ろびしゝみひゝり尼の指爪を押え
ねて月も見ぢゆゝこの俳会ならむや
初了山ふりけ下地ぞゝ見居
露をおもに居会一ぬれ
初了よとハ秋凡うといふ所も回じそろよてゆ
了に竹のゝさろハなるれども了ハ旅了とよゝき
ちゆ所なるれバ秋凡るといハむゝすゆハひゞたゆる
はべしをべて白をつゝ所みけんねる要なるべ



俳意ハ乃中のけはゝ〳〵居会ぬさの敢ゝら
居会ぬくとつゝる〳〵之跡をおるゝとい所甚
斉之けバゝりゆたゝらなれもの城かゞゝゆ松ろ尼
たものくおるゆをけを乃名人のゆ段ゝるく
ゞし
町京のつゝゆと　砕〳〵花の伝
門ぐ押おゝ〳〵壬生（ミブ）の会仏
ちゝ尼ふ巣のいさゝれを吹迫し
はゞめの白ハ町京れの法れ立て花尺よりて
つゝゆと砕ゝ所とゝよを中の白よてハ壬生

の宮仏まゐりたるとつけるえ恠の句なる
猪じゝ巣桶蕎ひゝきゝけふゆゝしきまえ
古瓦附会の清稽
ゑぐ居るゆゝふ 脇わづらふ
江戸の古右むうひの真さぶられゝ
苔句俳諧人のとゝく 疾がちなる仏ちまえ
接句ゝの人江戸よりのがりゐる人と見て
疾仏ばゝ丁ほ古々の立ゝきにむうひのう
さ枯ゝびり来て枯などとゞけ江戸乃
ねがゝりさるゝ仏ちまの附会なるべた



さちよもいんどかゝら 臼茂賀
方くに十枚の田乃 陸の さる
京のふ家住の河のゆゝ仏なるべし
桐の木高く 月さゆるえ
門ゝめてだまつて蔦る面ふ仏
庭の桐の木ふ月のゆゝる家をひゝゆ居
と見て門ゝめてうゝら蔦ゝ仏さる乃安
仏をつけゝり
ひゝらめゝと堂で まゝぐゝさる
初七十ふ女房の歌子 拙義く

貧者のたぶ〳〵と生をひらひてゝゝぐしたるまて
を養ふへ世界の教子に孤を〳〵なぐ〳〵て走き
わたらんけげめたるたゝ〳〵さてされも又人情の附
合なりけり
まぐ〳〵此春も さてはぬ 法人
法下の風流を送る花ばなり
たぐ何といふるもなた附合なるべしれど何
やらたぶめわ〳〵たるこなの白ハゆえ何かてはは人
〳〵たる人の此春も はぐ〳〵さてまだ法下などの
せをよなめてゝるこの附合なるべし

どの家も奈の方に宮を何れ
奥にくひ何〳〵く 侯の 鞋 炊
お白ハ浦色の庁が八町ゑ〳〵どの家も奈白の
宮を何〳〵ゝ体之恪白ハみやとわ〳〵めれ人乃浦
色に帰ゑ〳〵く 鞋炊すも奥をつゑ〳〵ゝ体を
ひゑ〳〵ゝたぐめハめづら〳〵とめでくひたれどゑ〳〵く
ひ何たたるとれ附合なるゑ
ゑゑ色帰一枝〳〵に言〳〵なり
まミ色の 高乃 果ぬ 用
お白ハけたゑ〳〵 優艶なるけ〳〵さなるを

後句川柳じく世間のうにゆなし志多秋
毋子の心弁用れ時ふをつけうり
儀へも志らせさで嫁成連て来て
屏風のかげふ見ゆる菓子多重
此二句ふ人情世態をつくさりといふべし志
位のもたなどの儀へも志らさで志つそりと嫁
をつれて来る之後句ハ家などなるやうす
ふて料理などさるを儀をふの人の伺ふ
ならむと片しのぞけバ屏風引まわしたるうげ
に菓子多重のりふ見ゆるふたてハ婚礼なるて所



よとたくやくたはなる公的位色の身ふてかるふ
ねぐをみつけれ〻ハいぶりたるふ志べて
俗諺ハ才一人情世態ふわるらばれ〻ハ家
ふをしたるすないひ出ふるかく
妹をよい不ろうちもらりて
僧侶のもと一生文成やれ
志れも又人情世態をつきりきべく家信の俗
諺ハ世ふ成ふるふをきにたりり久しく絵ふ
もつぐりし妹成思ひのおよいふうちもられ
くさでふお徒さハまれバ生ふれ片ふ俗文坊

の俗語なるべし　まさごもとへ文かきくろのりを
ちとたるるもの附ごろなり

家の名ぶ　孫を見るより

雑汁（ぞうに）　わかいものすゆゑ舟めて

さるも又ぬ乃附合なる里芋の白ハ大水の所をもて
緑の沢山なるゆ緑汁たきく皆ちちくちまま
なる里芋れ中年達者れ老人所ゆて老い者ゆ
よくくひしとつゆをしみえいでさのげむれふ家
の係ふ行を見にゆゆむとつゆごちゆくとのつけ
合なるべし

雪の詠次大げ　たれ　紙　月
ふとむ　丸げく　お思ひね新
芋の白法雪の俳つ　たれ　行春凡の吹新れ
月の紙くと片　ふ　教ハいとぐもの思り
からむといが行人のこのひくべーやいろれなどふ
とむのとみ羅もつ　ぐりゆなく　お思ふと附
たるる

さつち　なるを　と一　所ぐらせ
泣るすれひろふ　おまし　泣ぢふに
さるも何と言ゆ　ゆるハなるをごや〜さて

ほのぼのふけたる夜ことなれバ泊るのひろうもゝ
来しハ人のなつかしかるべきなるべしゝ
まゝまづハ人なるも先だるこかたかなりたれ
らハたゝふ人のなつかしてたつちけるもの会
仏さへたゝふ人おぼえてとへばのらせく鉢をで
くハせたりとふ附合なるや

今の月に雪のほつたをけること

年賀（ネガ）海ぐとほめられ月ハ
秋も是をもハや雪ふる沢ハ玉の百姓
ぐもゞ年賀もさまゝ雪の俳へたもゝ



てほのぼるとの附合ことなく雪ハ豊年
桃（キヒ）とハ原ちろをもふ炭り

堪忍（カムニム）ならぬ七夕の恋

名月の月にほのハせたる芋だゝけ
ほのぼのものくよたるなゝ拙ほどなるほどよた
といふ伝法ほのり七夕の月和れよたとつ有
なる里附句は雪ゆるてハ芋のもの来ハゝ
むいゝふもしく名月の月にほのハせたるのと
ころ有り

晒（サラシ）のゝへ千ゝ雪さへづる

花見ふと女子だくりめが 連立く

大和路などのたびくれ晒はらくはるゝ芝ゐと

りに玄蕃のさへづる春のけ　たはなだくりめが 無

為ちくへもちくくるる貧ふけぐめたゆくさぐさ

好　扇の俳なたやけぬ秋の風

剣本　乃　安　たは　玉の　家ゝ　も

二句の百にかざりなたはまくふ解つゝ

ぐらゝぐ俳をたやけぐらふてゐる人を貧士

の猪者と見てけぐ剣本の安たは玉ゐて住

よゝとさゝめゆるゝ



ゝ八金の千葉に刻むもゝ八の元

馬に出ぬ　ヨハ　内ぐ　意志保

句ぐ俗乃ゝ八金の内　葉きぐむ八ねなの

擂ぎなどのさぐゝして馬ゝくの恵を付る

ものゝ形り

俳小門の秋　五十　石元

小鳴の徐鬼もをきる月と花

小風などの五十石元のうけだりたはやゝさを

て門がまへもれぐるふつゝりなし玄蕃に

強七月を[illegible]らせたれなるべし[illegible]ば俗句に
て八幡宮の仏土などゝ見てはこゝに此時の隠見
畜生までもほとをさまりく[illegible]ばとなり
月と花といふにたゝ[illegible]ばかりで何ぞ[illegible]ば
ものゝ[illegible]て一句の[illegible]もて八月花の[illegible]ば[illegible]
[illegible]見作も位なりむとゝ一句のさゝ[illegible]
ぐ[illegible]とさゝ[illegible]なるゆゑ[illegible]びて[illegible]
[illegible]

川越の常しへ水をひぶるゞ
平地乃寺はゝ[illegible]さ[illegible]義堀

茶句川越ふわ[illegible]ば[illegible]常しまで水の[illegible]
ひぶるなどゝ[illegible]句ハ[illegible]ば乃中ゆ[illegible]べきまゝ
堀出さて野の　ぜット　若ほゝ[illegible]
ゆ用ゆ浮世を立て京住居
茶句ハ[illegible]ゆめ[illegible]ことゝ[illegible]
らしとゝ[illegible]ば[illegible]ば[illegible]
[illegible]ば[illegible]京の住居
る俗句之
中よくて侍森人の借わらひ
[illegible]を[illegible]いく　森をぬ名月

おなじくいつるの八ちのくるしがたと一ばにて侍
の名屋住なるべし見て侍べき人の発句とて
ゆハなし　たるたえなし　さるぬかりわらひする
なるを恠句ハこの発をたいて孫なくとなべ
めくさなこ

鶯の　ゆるゝ乃　縁をひらゆる
ちらほらと　芝の　初花の　切庭り
鶯の　鶯ゆるゝ　成つけ　さる鳥をふきぐこ
かゝ　ふを　鶯の　美の　隙と見て　芝の　初花の　切
うひえげさけまたをつけり

きのふうらは　ゆるる　月の　姿
狗（ゼム）　蒼（イキ）　かきく　紙　きく　なほ

おなじなし
孫が　孫なほ　祖　又の　借物
紙　指ふかへく　用ゐる　旅　力
芝句を　軽き　侍の　内きと　見くつけたる　孫と
侍を　つがきく　借物の　かゝ　身を　もち　きなほ
べ　けり　句ハ　なで　祖　又の　ほと　成　孫ゞ　なほ　ほとゝ　ゆる
なれで　借物　ゆるゝ　紙　借の　をく　みと　なる
ちゆ　恠句　刀　紙　指の　ゆる　成つる　侍の　孫

やうすなさうせかつほーげほとゝぎすのなきなたなすなさうらきるる附合之

世乃業に小路堀て　おきーろた

門のうち付

ほうゝほうゝなゝ

茶白太も太も義堀の家よて小路のいと抜け

きバ双方よりの世の業乃さぐり所ひて小路の

ゆらるぬほぐたちの乃が　おきーろいとゝいふを信

者のけほゝ見てろのは小路乃家に信者のそゝ

れが門のひくくれバ何ゝゆうつなゝうち付てむ

はけまほくまぐくさろゆくた俗信居者の



ゆゝ　京の道連

有明に松くゆく花乃ちくはひて

京のゆゆけ乃きをやつて丈出ーくさでふ

おくさ乃乃けた之八三月中旬なるべー

も　拾ふ小　峯の仲百ろハくと

ぐらゆと　乃　晴れまこと

小峯仲百ろも拾ふ　ふうハつくはく乃よりゆは

ろつたてさくろもと家乃日和なゆーが四ひの

ふゆぐらゆと晴てきこたなりたるをよろ

さくぶていふ俳合なり

樫の角乃大てぬ　貫穴

演出――の牛ゐ　俳を はこぶなり

ろくろ引われ　れたるむり

むしく来て栗も樫もむくの壱

俳僧　――　鉄　ふ　おの　紙

切ふをよくよくつけたる俳合なり　栗も樫も

むく鳥のむ　ふくりの山なり　或ハ大なりと見

てそのなり乃とく人れ　ふおふのりて出ふやす

見くらべ

はぶてさふ　星乃　さぶれかくを新

引立てむりふ　蕪をふたをやり

茶白員人の　れ　なるさぐことして　ろくろ

はぬ舞の　り　鉄つけたり　何ぐ　大れの

ちゐ茶ゐ　出さ　ふ　ふ　ふ　へ　俳諧せよ

とさてめられ　れど　ども　ろ　ろ　ぬ

ゐれバ　に　むさ　びて　ひも　ぬを　大れい

りゆくなで　るり　ゐみて　かく　いなむ

後ろの　ふ　れ　り　立て　蕪　せ　の　ま　ふ

りゆゐく立出　なる　さぐ　ろ　ぬ　ば

形きばめでたゝ〳〵ひ蕎麦べくもひらねごもと
よりみるるたゝみ人なるバるかたへたをもうを
すゝ〳〵かの清蓋は秋ギヲ抵主ふゝ八せ秋の静
に蕎せ〳〵は併なすり
盆仕蕎一蕎でおぞは結の奥
豆蕎の癖をおし〳〵かねりり
併の人情は併合なり思ひのかふ多は蕎も
よく〳〵結の奥も一蕎でおぞは男をつね
八豆蕎なゞ〳〵て業ふれ〳〵りがちなりしが
ふゝさ沢よりは思ひれ〳〵蕎麦ふ結半し

豆蕎もよりらぬすと思ひておてろを行ふた
むるとうすゝろを出しうねゝりわゝりふゝとふ
てさゝ〳〵おるは多結

中国よりは 状の古古志

新はのはハゞ〳〵やゝふる蕎孔
古ふかめでたたん多はとゝたゝへ大坂ひるり
の金もちはゝろゞふふまりふゝよおよよ
りもかゝゝよりもよたるのゝいひ来るゝ
なふくゝわゝくいりゞ古ふハ代ゝの豪家ふハ
ひらでちゞろよりはゝゝ新日のゝばるるめ

く出世したる人のりふもいかさも人さまてなけれ〳〵又もやゆゆしきの世もめでたたるをつひにたるなりかくとたてハ世白の花
後たがひたれやゝなどさべて世白ハ黄ふ
しくなるさるすべめさろたてたくべし
家にむしかまるを桑の枝乃 桃(モミ) 楓(カツラ)
山ふ門にのる 有明の月
桃楓の木ふ門だりゆ人ゆるハまるやいらむ
さるやいらむと月乗ふりゆたるこの世
今なり

水像 ひらあ 演のふゝわし
見〳〵通ふ紙三井ハ花ハ咲ら星
おゝえなり
ゑちゝ風の又面ふなりゆ ふふなゆ
わがまふ 紙を たるゆ がらゆく
ちゝも名高ハ奇おの世今高星黄白ちち
風の面ふなりゆふふなゆ 乃よろづちろ
なたけ さなるに多の上をふうく古人
ふくらげふの紙をうゆて キ 邪(ジャ) 氣ふ
ちゝハせまゞたゝとてしむちまえをてね

の定らぬ風の吹うつるハ人のうつろもけぶらぬ
ぞおもひたもものこゝろ疾ハ時節の変より
うゝ病ものうゝ風ハ百病のもとゝいへるもうのを
とわのこゝろうつるものをふくみゝいてゝ病ハあらね
ぞついでふいひつ

喧嘩の法をむけてせられぬ

大切なねがニ日ある養の陸

此句や候義ぬべし大切なねがニ日ゝるとハ父
母の余ねなるべし養の陸こいてゝ病ハ人
をゝうゝ位ゝむゝ父母をうゝみの情はゝ

ふゆらけし入れの陸をきくふも男ゝ変ゝ
たとよみたまへるうゝろこゝ父母のうゝを
きバたのゝがゝ多をもゝしゝむうゝひ喧嘩に
論なゝ父ハかゝゆゝもたちゝのゝぬ若子の情かゝ
しむべしなげくべし仮階をたゝゝすと
思ひうゝかゝれ白ハひゝゆのゝふみゝものをバ
れきらゝゝけらむちゝどれきなゝらでゝの附句
をきれ人やゝゝゝる論ゝ若義おきゝ
事ゝゝゝどの事ゝけハ皆出家成
奥の世並ハ近達の化

はるばるみちのくの奥州すり任官の京へのぼる出家
なりむりかしぐ大なるしみ豊後のすをいひ
たるり

春雨弱法師 庭の正面

ぬるらぬ姫のたるろ丸志づ矢
ちるも谷の名をるたは白みて人のうくしぬる
白なりつけぐろ沼とやいハむ高しやいハむ
たるる家にものすし内まぐに奥ひみぐれた
ハ姫のつひ六ろとめたるハ奥去の産
ぬみひるめねるくふ庭の赤弱法師むらひて

たるらむなるろのぬをるむとるほみ口吹尺
鳥公能をつらわと松らて 松の風
大工づひの奥にさるゆ乳
苔白ま牧のりしたるて学弱をけぐめ
内まぐ乃ふ香公能をつらわと松る尺人公奥
しるらぬ宿とりて奥ハま牧すり大工つひ
乃きるゆるゆるるなほ内まをつけるり
米橋もりふハなりとくゆるる
からり分で市の市をれし会
内を教るるなるや

月氣の雪も降てゐる雲のそ
こまつふく狐をわけるかるかた
附ごろをたはもいはるふ出く志まふて
ろ狐くゝ狐をりけるを中のうまと
鳥で工夫なしたる悪俳
狐がるすの所によまく格の番
お白髪の爺ハかちらだよたは木かわと
ちゝはゝちもいて狐ハ悪俳の爺で工夫を
もゝゝるりと恠白ろの人を格さと見つけ
たるハ伊の翁れ人を殺るをふく格さおし

をこがましたる男ゝて狐をいやしさものゝ子
思ひろ狐がゝすハ伊の格さどゝの格さな
どこの所ともよはるゝだと者よりの人ふはゝゝ
まゝ以て八戈者で日和の工夫をもゝるら
馬毒ゝく狐ひ和歌月の氣
尾張でつゝさしもとの名ふなる
いゝなの伊ごろよ
殺ゝら村へぬける 意 左
吹 兼ぬ 鍬も 闇もにさいゝく
百姓家の一村ゝて家も古く田畑もちは

金もいのれば村中にはきく男のこゝろ
義より村へ出る事を意とせのり
世世を椿ふつける 狭衣
歌 こハさる 月 聖の 末
笹若ハ何ならむ及ばぬのけ さ見ぬ
えゞへの今を 毎一 祈る
対 付し 物 事 月の
お白ハ 恥つさのけ まて 同 ごゝ
常 して 商人の 乃 る を 仕

新 下

楽しだい又くく毎ふ楽こみくおの伴ゝ
ゆく人なれば先ゞへの今を毎一祈し
なるべし 接白ハかるゝ 対付しみ
玉えより来たるえけぐめて去ろぬ入る
みおならむ
この会 去かゝ時 れを
墨 匂 の 同 ゝ さ 侍 侍
ぐらくとる去ものを寸ゝる
かいらがゝれば 法 敦 朱 能
この会 去ゝ時ハいつでも去ゝもの

なほべしらふハ何ぐし盃のちをゑるてもてに
人くのおもくつどハせたるに基の目の百ふ
まぐひつしり侍の居りたるえちぜハす
こうゝ体の時伊の大もたえぐふちゆて孔
きたその伊倉えふうくとけバ左ゝかゝ体の孔ち
むたとゞふ人ハこの可の倉ふつらゆりたる人ゑ孔
ぞろの人くふちゝぐひてうゑ人をまちゐる
侍のいつゆさゝしてつけるえゞひらくとゆる
伊ゝろをり侍ゞくたぐ武士の大屋敷と
見ゝて基の目の百るも侍のつゆゐるふ奥座

の伊ゝゆふてぐひらくゝとるちのあり何
を左ゆまのゞ見ゝまゐ孔と基の目の百ふゐ
孔侍一人なるゞとちくれてゝゆくゝちまに
つけゝゆ百の白ハたゞゞひらくとゝふすり垂
ヲかゝちをつけたる一狩えちゝ孔ゞちれもちるを
どの為侍いまゞぐゝのハでかゝちの寺童たゝ
孔まのちゐるゆ百ゝろすりゞひらくとなるちると
ゆても百ふやゝはらむと思ふ人侍をつけゆ
髪孔ゝやゝ見遣へる顔
座ふハり竹つける義の目

撰織きぬ　角力えの帯

二の白ゐのまくなどをうたゆ白ゐ
巻くふ人なゆひてたりうまるる人のやうに
まぐかくちたぐひたるやうにてうたもちうま
ちかくたゆうまるるふがまま
くふまるる人なくたぐめ法師の人なゆ
ぐくハ紫袋ハやうてゐるえちてうまる
たくふちまるよりたり後の合ハ角力えぐも
袋よせくく帯などつくらせくゆくふる使家
の宿ゆて産安くハ行つみるやうまて

さ方やうまるるりたふくりまつてつみたり
枝ゆの昼乃まぐひとつ有
白　供ふ帯ヒ々年使ケケ　みも　花くろ
いつくじふ　ゆの　乗いり
まぐ枝も見きらで立ゆのぐらく昼もひとつ
ふくつ袋る法より花山などの花見人ふく
いとひそやうふ出立ゆふち供よハ使外
まゆりぬくもよいのきをのくたるがのうく
びていきみゆくといふ付合えのちは白ハたぐう
こらのやくたまるぐてふ花ハまくうち

うりむすびてつゞれば白おもゝろくさか
出くるほどまもなきこゝゆ
手紙のをもつくく人の名をとふ
本猪が出るがたのくかとゆゝり
上雲を岩しゝく猪をつゝゝ玉
さゞめの白れ猪ごろ〳〵ろ〳〵ゆまゝけーてれの
く本猪山かとゆゝ時その家れとゝゝゆる
ゆをしゆゝかすゆゝ用ゝゆれゆ郎のをれと
せゝゆ城猪(キヤウジ)住なゞさるものくもち出て伊某
男とハいゞれの男ふまさゝて名をゆふとゝゆ

今なりの猪の白ハかのか猪乃ゆのハ内のゆゝるゝび
ゆゆ山てよゝゆゝづゆ大杉伊れ内ゆまゆ金をゝゞーて
猪をれびくくしくゝつゝれけるえかつゆの香のや
ゝゝ貧ーゝゝゆゆ者と見てつけゝり
れ風の吉むくくと吹 板羊道
さくゝゝゆゆがゆるゝと 岩屋門書
猪ごゝろゆゝゝ内目をゝり れ風吉むくくと吹て れ
吉内まゞれ板中るふ門前の子をさてゝ猪り
しなるべしさるをつまのきゝつけくゆる
ゞの家をたゝれたれくさて内まなり

馬一疋ふ宮を飾ける
小でつちの時うら屋てる事云人
腐ゴブ ゞなけきバ井戸元もつ
二の白ほきさて乃なし惣の白八清鑑之
小でつちの時うらつられたる男なれバ尺はな
家なでまこせ井戸をもたきふ之ちきバ
かゝわでまなく痛もなゝお産の男なりと
八井戸元もつ人のことバ形るべし
ほの摸うら 牧 柱ゞ たつ
二の丸乃尖かゝやぐ堂屏風



ゐもゐゞつゝく ほむの 彩ね
大木の摸よりも牧柱乃たつ小八漆中のちまと
見ゝく二の丸ふ八重屏引まりゝく尖かゝやぐ往
撫なふ古鉾をつけゝり二の丸三の丸なゞいひ
ゝく鉾の名ねりつゝ諸侯乃屋敷もほ
新ゝ之のちゝ白乃小八彩白なれバ丁ほとめ
つゝろひて鉾の掃除なゞ奇麗なる之法侍
の登楼をる牧なれゞなりゐもほゞつてといへ
ほふ重屏の牧ねふゝつめて尖かゝやぐ赤ゞさ
ゝゆかゝ其の白をいりゝ附屋一惣白の仁

はるゝ花白をいろ〳〵もさろ〳〵もまるゝたるすれ
はまのとしほべし

松風通ふ庭の立花

墨(カブト)の沈別(ワカ)れ人ふむさびぜゝ

軍書おぐゝりのまぐさえのまはづれの軍
ふ打立ゝゝかねてちぎりを事〳〵女のもとに
わかれを告ふ事〳〵けさの軍よはちぐめ
て討死さべりれば〳〵びのふすかなまど
きなど涙なぐらふものがゝりゝ母もなどい
ふちまえさでよろの女乃もとより手紙(モノグ)見

て立出ふ墨の沈をばかの女に後ばせたるあり
ちれば言にかさなるらしたる花れ庭ふ立た
はは不ゝゝ

ちまぐ〳〵ふ立の馬刀貝(テガイ) 立貝

ゝ〳〵と朱ゝ〳〵妹(イモセ)背かゝらふ
苔白はたぐいひのべたる花ゝの匂よてちきるち
ろ方けまで後白川はゝ〳〵思ひのかぜ
をつゝは偽なめ白ふはちぐめはゝもふやし
からぬ人の恋の所のやまちすりちまぐ〳〵にちきつ
ひゝつひふゝ〳〵とまでなめてもとゝもふ結ゝ

まゝ石つゆもうへぬせつなゝ中之ちまぐ〳〵みと苔
白ふいひならべたるをいろ〳〵のくさみよりい
たるもの〳〵にとゝのり

喧嘩の中をむめに引のけ

仕合と矢槽乃舟をのらなむぐ
附合矢槽の舟乃喧嘩と見るふたゝ
へバりふハ風ハげしりれバ船出せ海ゞといひ
いや出さゝとりふよりいひつのゆて喧嘩ふなり
たるをりふハ出ゼムテ船よるらぬ日と思ひ〳〵つひに
舟るものうゞ喧嘩の中をおりけて海ゞ

がゆとゆてきけバ矢槽の舟ハ風波ふ揺ゞて
人もけゞしたりなゞきたちくハ赤ハ仕合
なるものなりとよろこぶちまゝ公務のつ付句
ハ句〳〵かぎりハ船ハ情をふくめり
せめ〳〵と位子をゝ羅ふつきすえて
大工屋船屋乃　附　船番乃
内ハ大工も来屋船屋も来ハいろゞちふ位
子をバ羅ふつきさえゝ金左ふの番詰な
るべし

一里の船も彼の去船なる

山ハ皆蜜柑のうれて黄よう成る
はく白蓼太が芭蕉句解に弁三すしうく発句
ふのらだといひしを伊賀の桐葉が蜜柑の
色といふ集故出して附合のうちに白なる
ものを白うせしにのち蓼太が物てゝ今こゝに出
るよしかけり蓼太ハ君子なりけれども
句ハもと附合の句なるを発句ものきらひ
なるゆへかゝるすハかの句ふもにのりなるゆへ弁
三すもきらひなるゆへにむかぶつるなし
とも思童の句らをひなりりり附ぐろい

山松より山松一里のうゝまて舟中よりみる
やりなげけたゝうく後のきゝくるといふ
小蜜柑とうけるひぐたゝ
先人度の風に人死がなる
水くさたるゆるなる蹴 嗜ゝ
ちれハうのゝすをきぐるつける一祇之一ねに
きるるすハこのまぬるゝ太風ふ宗もくづれた
びゝくたる人死ふるゆの葬礼のきちまぐ何る
となり
閑に今ハきゝよる かハせ 祇

カロカ

減の苔 まつりゆとのむ

おれも俗の人情世態なりと雪花の丸まりに
さてろづらひして立積氣をなやめる人と見る
かいせ花のうれも引くと時百どりたる
げやくくとさくくゆたるなりかく体身のこ
乃人ハ手中苔のむちまくことふたゝなり
上を見てろこらをちそふ墓矣
を稱ず 入数 ち角ゆの 孫
町さちのやくさ見るげめし上下の上だくり
見くく色不の人乃墓矣をちそひつるくこ



後句もろこらの切不くくふハ何がし屋の
ハ通めゆて家くふを稱を知るげ行ふ
て入ゆちまこ

黒くくく高 花 櫻の木乃森
月花ふちひちさ門を出ッ入ッ
苔句の樫の木れ森乃黒くくく高花ハ高
寺ゆ或ハち不ろと見くく大門ハたくふくだて
ふつより人の出入さ不月の花花の体との
附合たるべし
乃出こに眠薬 付こ体醫者の供

牧笛のかげ乃ほつとくれ来ぬ

醫者ハ内へ入いめてをだなをしてゐる

ふ僕のひとり行ゐる三月末の比屋の八ツ

屋なるべしうちのほうしも中よりの醫者よりと

もふうちかくらひ牧笛なでなりくもてなんふ

うの白ひれ不つと来ぬ

落雪の一屋むこ庭ふ降つ

次の田樂

蒲ハ老むと

うさぎの降りたる夕方ハ蒲ハ釜な

どかくりて老むくたるにち次ハ田樂やきて



匠のむならむ

手拭狐くれたる牛の蒲

川ひとつ渡て来たる牛

お白ねなるわくのの内まゑ拭を頬かぶり

とふものして牛を牽ゆく蒲の成れる牛

手拭をとりしなり後白ハ牛牽て川を

わくらん牛蒲成しかへるの内まゑ

ぬふといふて牧のくれもこの

方くへ醫者をいざなる蒲の月

踊の化法

淀も行ぬえび

紙四五の法ならす寺の茶法しる
はじめの句乃おくろよてハたやわをしの磬者を
ろこふもさくるのもいたりゆくさてゞなかと塔句
よしハ蓑の月といふより 踊の仏法を幻るもの
なたゆ夏さくろやさを磬者をいぎりり
て踊の仏法をさくちゆは附りへたる滑稽
なりゆの句形わく は格之おの句ハたやは磬
者なるなは法なる磬者にとわかへたるさくら
たなりゆるの踊を踊をみのちの句ふていちの茶
法の踊ふしたり



ほしゞ法ものふ菊をやら法
蓬生ふ夜をやめる 男ぶり
わくるし時ハ名言るたいろちのくれさきくし
たをのとなりしゞいつのゆどよりゆ思ひへてく
きくるるよハつゆたちまゞらハさて蓬生の俗に
は者ふかくれて菊をつくりて たのしめ人の
もくより世のかれ仏れくりちかなりさふなれて
何くまで思ひくなれ法なれバほゞ法ものふハ
つゆたくまゞくり菊をわくるくこの附ごろなる
をたり

濕のふたぢのかわた　南風

丹波くら仕もなくて　啼鳥

旅ふふしわづらひくさ園をたづねゆく時な

らむ啼鳥とてふぞ眠なる

それ春が来ぬれど　利とさへせぬ

雪ふ出るくちばうを　遣ちらし

ふ立春

只　五中に　月ぞ片えりる

秋のひつりゆくしく　ぶ片もなれ

其秋のなかば　中ふ　ハたぐ月片えて　秋

の一年ここゆるうさこえぐうふて稲妻のひつりし

たふまく　旅ハたぐ　月ぞ片えりるこたぐとふ

字ばうくひぐうせうり

たやくわがやくて　年が暦なる

奥の院をづくく　花をけしのぞれ

おくの院　十八丁ばりよぢぢる　途中ふわふ

とたやくわがたらけてたろわ　ふわしがつひゃ

みく氣が　暦なわしとふよりわ　奥の院ハ何

となくそらたろしげなるものなれバをづ

くけしのぞくとふ　附ごろならむ

春の日に蒼空家の伽乃つくめと
かいわづくや　河漬くふらむ
よく世能をつくしたる句なり春の日は
くしきに姉妹なども立かりり入かりり蒼空
のかをしみるに一度ふものくふすもならば
たるすにすわかるなるべ……
いろづく皆　股立を　えぶび
目つらも　河らざで　立ぬ　俳なり
黄白を指傷の出立と見くつけるこ
面ひかる　櫟　林に日がくれく

俳の本地をつむ　糸たく
いうなる附ごろよや
さろくと白換出をばかくさん
ろぐろふ茶のくるる　牛　郊
郊外の居住住たるけまこ牛郊に茶のハ
ゆる宿さろくと白換出さむほくぎたも
たかうなべしかくよく不を立めく俳句をす
ぬし
羽二重の赤ぐる丘に　おもひ
わらい休うら　外ぜりさ

苔白ハもくれ初思ひきれ人をたとへいつりの
なごちれ二重ふきてろなるれどろれ見べた人乃
内まをいふ之後白ハやりり其人ふてれ思ひといふ
なくけく〳〵けん人ゑた時よりれぜりきほ人
なれバまして初思ひの所る時ハなるれちら れ
をたのまむとこ之れせめハれふなれく〳〵伊
すれもれだのこきほ人をいふ後之
鶯を又ぬきまれし けちの月
白田ハ伊れく 山菖 乃 花
町ハづれなどふ田地れくもちて鶯伊まこ鶯ふ



人こ見てその俳白なり
日ゑへだむかく下き 秋の江
ふれぐ たのむ 乃 の子
夕風ふ蕭生の家も敗れ行
ゆえ伊ゆて乎を日ゑのゆりれ伊へたのみ
下きこのちれ白ハろのわけをいふまてろふく
蕭生れ家といふを蕭生性の家もたえると
いふりれきらせく夕風ふかまくと志をり
をつけたる低こ白ゑハ伊度ちるゆえ伊ゆて
蕭生の家も紛れるるよりくれぐも乎

のゝをたのむといひやりたるこゝろなるべし

玉みぎ何ゆがゝることそ

花の何るゝうちハ雖山をぶらつきて

茂ゝるゝ　黒谷の陰

茂白花の何るかぎりハ峰峰ゝハ東山

と日くふ雖山をかけ何るゝ時ハ白ハゝの

内まをさぐにつけるゝるゝ体黒谷とひゞ

たゝくいひなりたりんをつくべし

寒内ゝに世のひをを吹立ゝ

石町なるゝバ各様なるの陰

林ゝゝのかぎりをつくしたる附白ゝ大病の

人のかゝをゝゝく茶菓ゝ水なりなどおし

も冬のはなるゝバいと寒し病人のとゝらむかく

何らむと楽ゝ何る不ふ陰の落れきこゆ

るもおもをぐくまゝや毎度故先るふていゝる

ゆゝきゝ松ゝなゝ内まゝくふ思ひわづらふ内まう

時かゝせゝども まゝけぬ　ふ　解

孔子を松傳の胴巻のゝ何ふて

茶の白をおなるゝれりたゝ見ゝく情をふの

むつはゝじたふたゝがひに松茶をのゝ何ふ内ま

たゝり奥黄の小鰈を葵ゆふ素〻体をとも
ぐに西ぎぶふ志ぎ〻浦ぢ〻くの里とみゆ
塔濱ふふゆつ〻さたる体青の月
無住寺 寺のいちひ
茶白塔濱みゆ〻ふも〻降〻塔や〻畑もた
えたる体ふさよひハ青よりたれて月も懐なたす
ぐ〻え寺ハろれ何〻ゆふて住ねのなくれゆて塔
ハ下雨法汐どもがれのが老てにいちひゆる体え
たたく家のうちたたゝ体お
花に森む一ゑて書たまえが〻

附ごろ花見よゆきて宿のとまる体べきなけ
きバちひたた家に志ひて森〻ふバたたく家
ゑ〻なるおまでもちくちたとなりちんども
古ゑてのたたなたゆ中ふたぐ一ゑて志が〻て
何〻くらきふろの上ふて森むとえゆりた
旅森なゆりゆ
牛塔のうちすゆ霞む嵐穴
馬の巣かく〻泊もいろぐ
茶白牛塔の下まぐうちかきて嵐穴もゆ
るえ塔白馬の巣黒かくいろの格となるべ

李なけれども白中の春を見はがめし
とハぬもわろし　婆々の吊

椶りに来れど打ふし　夷　蓮

まれ小引ちぎ〳〵たる俳合之かれ小婆々の年忌の
とむらひせむとて椶りに来るこちらハ夷蓮
ふて客のゐるちまゑ俗めくりくとらば夷蓮の
家ハたも屋まゝ〳〵婆々の吊きゝ体ハ借家と
うゐるが椶りに来れど打ゐ〳〵夷蓮ふ
て椶もかちぎちゝ〳〵婆々の年忌もけ方よ
りとハぬハ何〳〵らむと心づゝひ〳〵たるちまふ

とりなしたり
板ゐろびのふけ〳〵庵る坊主
百里ろのまゝ　舟のきぬ〳〵
苔白ふてハたゞ坊主の板ゐそびふ出てふけ
てもどりしきゞ〳〵れど後白のそろハ後乃
拉女などを買て行ゐの行けゞれ船出さむと
いふ年板ゐけてわれ俗りめい〳〵ふ船る森る
ちまたならむりなるゐ打ぎやうならね
うゐもろハきぬ中ハ生　蓮
いふ〳〵ほど俗ふと生なれ月ゐれ

伊の人情世態

榕沖に植てゝ名づく庵辛子

傳子かさぬ新宿船の舟

をゝしたゞ付合なりけり舟ひとつ宿船の前

なつてゝ五てのよゝハ傳子をかさね曲突の前

ふハ榕沖ゝ植ゝる庵辛子の赤さうけく

ほもゝるべし苔白の庵がらしを庭ゆて

つけバたゞのゝ五ゝなるべたぶ者船舟と働た

るハぬの又ぬ

考ゝ[illegible]まゝ花ぢり

百性やきむ苗代乃傳

花のちりを考ゝくよりのまゝ百人を去

和ゝ[illegible]北百性の苗代対もゝて傳やきみと

見ゝ[illegible]付合よやや

江ひと名や　栗の代米貢

七十ふ名ほをよゝろこぶ助扶持

苔白栗のれ不れくれ米貢ふも栗をれ

てまつゝるなり付ごゝ乃ハ国の風俗よてふの

守よゝ助扶持をたまゝるなるべし内ハバさと

よゝハ扶持をつゝる年ゝくよゝろこぶさまなり

栗を貢する古風なほ存するべきさまこそ
まことにしらべよたゆたかへさぐもさ
ういをたりぶれるすいふはなたぞや

三尺通り　さへのいけうけ
涼しさハ蚊ハ田の出　嗜よくこえて

涼風幽居趣

軽とは牛乃　方紙やさむは
里去ハに寺の　男かれさいろ入り
いろなるうたとめがく
其日にをどる　旅のくるびル



押　結ぶ　ほ　をのはをくひうねく
かくまぐく世然ふりかるるのほやしたる
まことよ人なしてはしむだし　お白人ふとれ
くふく乗物なるふゆく人の身なとこ小里も
ほるふをは日かへめにさるなるべし　附ごろハかく
だしり　がく見ゆる世の中ふくら山しつもす
ある月うなとい　ほさてろゆく　ちくもく世の
中ハりくめがさたものうかくだりの身を粉に
してもハくひうぬるものうと　ほりれこたるこ
をとふよて　其白れうつりいとよし

屋ふ屋をつけ〳〵 此さを筋
田の中に埋をぬ 石の 年ふめし
さるを世よゆ〳〵 何る附合之条を筋を人ふほと
らむとて屋よ屋をつけ〳〵 いと〳〵 れ不たよひ
の〳〵 ほ人情なめ 附人ろのを筋ハ田をれびた
く〳〵もちる家農と見て年久〳〵 持る田
の中に大きなる石の何るがろれハその田れぬし
などいひつゝへ〳〵 むらゝめ 埋のるるめならぬ
石なりとかゝるはちまいるも石性どものねがゝ
りなるべし

世之ふ反つ〳〵 月桃なるほ
花の時 能父ハめて度れられ
此白ハなど花の沫といふを字だるめよてつ
たるこ年いと高た人のなく明めたるハめて度
なりたるといふ伝伝なめなど花の時分に能
又ハ死れたりとといふるこ
度度ふ青の弦傑を引ちち
三臣 はゝほ子れよおさて屋 江
苔白ハれびたし〳〵 れまゝ深を度度ふ引ちち
したるこゝの赤ハるどもれるく〳〵て三臣まほ

よもぎのうちまえさべくるどもハいそげさきの
ちるハぎの白ふよくひでしえ
意伝ハせ 紀 鞭の てで体 菊の岩
恨 の 伝を いくむ ゑれ 生
そそらの人おちるべ
年よめく身ハ足種の近ぐら
位く 酒のむ 年 物 か 苔
毎益ふ まする を近ぐらといひるハ
大洋馬の近ぐらなどふ伝法省苔白の
おくろハ生酒足酒の多れ花ちく春ゑも酒ハず

まことふ近ぐらし 酒ホて人よいやめら体く
ちをしちよく多を拾く思ハ拾くたるこ恨
句も一遍ハやりめるの連懐して酒のむち
はとえれど体ちく八思のち年ふ物の苔へ
ろれて酒たくべ伝ハ年ふくふふつうへてきの
ぐろなるものあ形どちことバトさしたるふ
ものがちてこがくて苔ことに赤多ハ足種
の近ぐらくと思ひつ体に年よめた体年ふハ
かく体冥加なれ時ふ酒ひつ体よ酒ふむせび
く酒も えのまぬちまふとめうへたる伝乃

公羽の妙を版之
どくとく摘み風の何ゝ体さる

稲盗人の猛を解やは

苫白ハさと之方体まと之たゞ苫中のやゝまとて
いハゆる生ものらし畠盗人を去びりたるを
ゆるして解やりたる拙不附なり
月見ルバ秋ハ不ふるの出来ん
と涙ゝ嘉ハどゝへゆくやら
苫白月見ルバるゝたものゝかなしるル赤
多ひとつの秋ハ何らねどゝいつ体とろとて月

を見ルバ月まゝの多我思ひ出さまの多めとぶ場
白ハ何とも苫白れとら〳〵不来れハたゞ月ハ之徐と
つけゝいひ伝したるえは松をよく学ぶべし
仮ハ刹るゝ何ゝ体だゝめハ体徐ハて
任付て之戻さて 鼠方の家
田を植体白色白の稲乃も来
えゝどめの白いハゆる楽刹とハるゝ〳〵むつりと
たゞ刹さてたゞ体之二の白れ附ぞろ解しがさ
し後の白ハ鼠方鼠方とハよに白色白とび
うたゝ体之たゝ双方農家とハゆゝりをたゝ

たゝかひ

風ひやゝかにさゝれどゝの雲
朋輩なに角力のおもひ多いとゝはられ
風ひやゝかとゝのみすゝめおもひとつけるこ
羅宇はへゝ物ごゝもゝの事社大意
豆まきしまふふるまこと此東風
物ごゝもゝを二年の病ゝの枝とゝ体附合事
羅宇ふまゝゝ鼠ちるのはなをとゝのつるといふ俗
偖こゝ附ごゝろハ宮ゝ分の枝もさでゝ豆ゝつる
もやゝ言ゝ豆ゝすゝ何とゝなくすゝハ事にゝるさゝ

たゝゝ東風ゝよゝゝ吹来はゝゝくハ物ごゝ言
の人乃羅宇時ふたゝべゝ豆ゝつるハ物風の
町ゝらむゝ

小げやゝ世ろふ赤の紅葉

夏軍の者ふ引ゝくかつゝ赤ゝの
苔の白さゝえがゝゝゝれどゝゝろゝにゝふゝるさゝ
ゝゝ老人ふ紅葉の衣をゝゝるゝにたハむ
ゝふ所のゝゝゝよゝゝぎゝるがふゝたふ剥げやゝ
いひたるゝらむゝもゝ世無にゝるゝ人情
白年ゝゝゝゝつゝゝゝゝべゝ軍の白

ハ何〳〵までもをうくつゝ体なるひとゝなれて
おくべしひぐるゝ比なるゝ軍の方〳〵なるめと
い〳〵体もけ拾之附ごゝろハ大れの方むなをいた
りめて英猛成ひさるゝ夜ごゝろよハ実盛
が孫の鬚髭を宗盛にもらひたる伊もならむ
見ゝゝしゝく慚へ這入体月の友
庵の薪水をさゝゝほゝ男盛
附ごゝろ山里のかゝれ家にあゝろふく住者
なゝ体かゝ〳〵ゝろしめたる友の二人三人つれ
だち月見ゝ来てゝゝ士めたるゝ何くまで月を

見つゝ〳〵て今ハゝ拾屋へゝいりゝく寝るゝ体まゝ
拾の体まゝく小男庵の本体庵なりゝゝ体
一拾後庵なるべし
何〳〵ゝ綿子とゝらせむ 腦法師
此醫者師ゝりゝ伊ゝ 立体
弱法師をいゝ〳〵めて綿子ゝらせ体人ハなゝ
人よハ何ゝで人〳〵もつゝ〳〵たゞひゝ醫者師
ゝゝ体やゝゝゝ拾ゝ方なゝむゝの附合
なるべし
拾 灯 見ゆる

町の入口

女房よぶ米屋の亭主笑やぎて
町の入口まぐ拍竹入ゆる八蹄入と見くらの蹄八
米屋の亭主乃怪づれふゆくなるべしけらくとそ
米屋れすまた笑やだたれとふ滑稽之
夏きたる家の　孫こぬたたなし
たゞ　なきは乃　石菖へ来る
ちゝも名言たる附句之ぬ句かだうめつくたけ
き城を引たなりく軽くふはしたるまことふ
公の手段ならで住ら及ばむつみぐ石家の
孫六の水乃めくなるをぬたたなしたらむハ

六月も寒うらむかゝ体さてさはぐき句の次まハ
何のとらさとくしたる句ばつくなたふたで甘なの件
しさのうをを何らひてさとふ甘なとふ乃の
たゞなたりきば乃べたる体ぬとも奇ともたと
ふるたものなし
江湖板　田舎　陸尺
とつふりと板ふ入月れ鳥羽縄ふ
ちきるさろなしや
粽くちふれをくつ蒔の意　意
さむぶとのびる　男　兄　弟

上ふ㊙ど

一、度ハ江戸を見たゞけは小商ひ

多(タミ)供(ケレ)くむ〻〻和の門口

茶白小商人の常時ふて世の中見ふまゝすも

陰のまゝうらねバ江戸へでもりて一かせぎて

見てくたもの〻男ふならむり恠白もろのゝ

ゞらいうすきして立身せバやゝ思ひて和代白

さるるちまゝ

耕(カウ)作(サク)他のるをよくしは和尾

むく鳥のわゝ体ハ和尾も吹て耕作のる

もふるるとの時ふ附ゝ

風茶の縁(ヘリ)えれ世(ゴヤ)産も茶やゞり

面乃陣日成 かれ附つけふ乃至

れもしろさ附今ゝ茶白風茶の茶も茶祇る

人ハ人と言るるもせざ和ゝ出るるも焼ひ

ふゝ一日たゞ聡然として寝るるをたのめる

人と見てたゞ俳一ちの面ますの日記などかき

ゝりふハ日和ふハ茶などくハしくかきつけて

おくちまゝちれども記をかくとせバ附ゞろも

さく一白もつてならむをみの俳はだくめをかたつけるとつふまく一白新しくなるとかくはるをはくく思ふべし

藺(井)を刈 ほげ〳〵門ふひろゞ原

切(モカ) ふるで何ちらさちらへ咲れ何ふ

芋白玉不の内ちまと見て儀を不のむつまじき内まをつけくめ

くろ〳〵をたゞ云菓の行(ギ)ふ行ふくけ

神ふかなくくる 蓬髪乃嘉

ぞくしたる変の俳白くくそきさ云菓の行

とハ必行ぬ(ち)ーたゞひなバ松むなどいひーをれ

ろろしたるすに皆思ひてちざめし不ふ行く〳〵教ふ

くふまで行くれどもつひふ人ハ来ぞてやくねる

内まこかてのくいつりられたる原なふべしくそ

きくきくとつふ云みを甚ちくら何め俳白ふを

内なきくの女ふはくられたるくく芋の髪か

なゞめまちる家なつけくめ

かむくと有ぬ云を松 云お柱

搗(ホタ) 恠うけく

冬の風情云きめく

又くふ

ちひちたる顔の汗だらけなる
商もゆるめと内は打ちまもて
むつかしくめでたき内のちまこ商も繁昌しち
てまゝ中もよくく安房もよたん人のちひちき
新ふんやくちなりぞけハひてかとなりたる姿
なるらむ
秋来ても畠の土はひびわれく
雲雀の羽乃たえ捨ゝ幸
おの白ハ秋暑ぬたゞきちまこ附白ハたゞその
時ふる



濡重新 徒をさらへ汁ふゝ入く
豆の匠羅てうら砕のかゝつきて
ちきるあるゝなし
徒搽なる者を 汁ふゝ入く
居ずり 奥平 家ハひつとむ
前白ハ徒搽なる者を料理ぞろもなくむぢ
くちふけよゝ入つとつゝまるゝなるを後白ふ
てハさぞた徒搽なる料理く 重もちの家
ハよがれて地をふゝのゝ体さ白ふつけくゝ豪
家篭高の人の家ぞゝりふかゝ体がれ

國うら京ゝほ人ゝものいふ
南(イッガ)〜〜一句 橘〜〜 俳 ま 度
さんも世態をつくるを俳会之芭句ハ句なるゝ
こやこ〜きこゝみ出る男れ れまゝ 句 丸の明安
なるどゝ京京ゝめ なるどゝ たるつゝでに寄ねて来
ゝれども おりふ百 なく いろ とふ ろ
ふゝめて 接句 ゝて ハ その きこ たる男ハ國
ゝゝハけゝゝいや ゝき者 ゝても なるゝ ゝも 都ふ
てい句まゝ 橘て 艱難(カム) ゝる さ俗ふ ゝら 来れ
俗人ゝ ハ一おりふ百 なく 句 橘 ゝま〜バス ゝま

人の供に出るとの俳 ゝなるらむ
於ゝ ゝく 松山 京れ 有 ゝ 年
ゝふ人 ゝゝふ 魚 ゝく ゝれなり
前句月 ゝゝらゝに 者ふ 松山を於ゝく 百白
ゝゝ れゝ 接句 俗 の け れと見て ゝふ
人ゝく 俵人なる ゝまゝ
ゝれのゝ ゝれの ゝ京ら 俗
樋ふ 扶ゝれ 宿乃 氣ちぶひ
前句 乃中のゝ ゝきなるを たゝ ちふ宿とつけ
ゝ宿なゝふ ゝる 乃れ ゝまをのべゝり

分おなじに 変を志うく教
蓮生ふ和もしろげつく 伏見宿
お白ハ美さんの詠先れわきまへなく変ふ何ふを
さぐくなるを引時ぢて今ハ思ひたなれく貸
何くめれ俗侘成たのめる人くしたる俗めた
ちらたと
吸物で座敷の客をたくさる
紀陸のお切を又すて来い
大坂何くめれ町家の内まなるべ
降まぐ降何られるそれの一変きめ





多のひらふいく 撒面ユきる
古れも名たくは化之何られるそれの変さ日まも
撒面ユを古体くは俗何ふ
くいふすく言さ日をに白ハ世たるすく一白
ハ軽くしたてくみる之俗ゆ軽之を見ふす
またる古れちり
何のんおくも 志形ぬ 大きた
宿くぐ吐のハハ 歌喧嘩沈沈
お白ハたで変れ白の名お乃何ま志形ぬと
いふくろなるを恨白ゆ乃体の古ぐさと

七夕よりさき見つけおとりよべし
八歌の歌ハ
仕直り至
舟の歌の結乃時ハ
ハづ侍
盃を思ひ
れて續歌の船まむ
くくハ歌
もたれバ時ハ
ごゝ侍
とりよ俳合
なりむや
仕直り
ひぐらせたり
見代えぬいぐ
ほさ
屋の俳出
年阪ふちひ
きやつら
仕させ
事阪の歌ハ
屋まぐに
直ふ
ものを
なるた
く屋ハ
ぐら
家ふ
戻り
見代ぬ
ぬぐ

いふ俳合
竹竹の上より白た　額つき
五てた　琵琶をどつめと
琵琶一曲　弾終りて行方の上より白た額の
見えたるハ
家女
姫と
姫年　わるにを
家ハ皆
実くて
出ぐる
尖
姫の
何の
屋
整
結く
まふ
出る日の
月
末ふ十
ぐり
柿
たく
なむ

秋こい時の登楼などいふもの何の侍屋敷の柿
の木なりれもしろた附合なるべなる
首にものを かぶる掃除は
ゑん咲て茶なつゝ紛る意の山
掃除はといふすめ茶を好む匠士と見て意
の山に茶園をつくりたのしめるけまをつけ
たはゝ
窮屈けゝ 裃 ゑんなり
猫其ゝのちひちき家ふかやだて
茶白を裃ゑなれぬ人と見くちひちきか



のよろこびるゝとつけるかの者ゝ猫其ゝをて
らゝく家ふ居をだきだるのらのなるやゝまゝ
角力にまけゝくいふてもれし
山うげハ山ぶし 村乃一かぶ
村の娘角力などふれの化そと人もいひこ
わたるが思ひの外にとめまけて面目なるぶ
けなゝこの人山ぶし 村の山伏ならバ一ほ
をかしうらむ
梯けゝく茶ふれにゆく 庵の花
古 かゝさけゝ さて 春の 見すぢ

前句ハ山かげの庵すまく薪とてもたくハへも焚
ずとて山に入りて柴をとりて来ル所まなり
後句ハ庵の花といふに春風の吹きれて散かれ
所がさけしきたゞ春色を匂ひうひたるに
むらひのかくのれたる血の乃
一句ハ代をもて来ぬ　酒乃粕
かゝる句ハ洒落にあらく却てつまなたに茂
付之前句ことによらぬ句之
鮓(イスキ)の　若れ　松もとの先
簗(ハカ)木(キギ)ハまうぬふえて　茂付之



前句松もとの先に雑のなく不を占屋敷の所
まとめ見て庵にハ簗茫(バウ)として簗木ハま
うぬにえる淋しげなほやうきをつけたる之
まげらく　岸に　休む　代士
衣笠く　旅まる心まつ　なめ
つけてろいなならむ
大八の恵めうねたる　挟(セミ)に跡(ユウギ)
付　きれ　額に　編笠も　見えず
お句ハ何まり雨に跡の大八車も恵てゆかね
付なり後句ハたゞそれ物ニて付きのいそがし

内ふ浴もせぞ鶏もそらぬ海人も笑ぎてゆ

はくとゝ

鮮　弱　体なめ　猛　倉の浦

大ゐるのわくめて　田ふも　畠ふも

ほゝえな

立なぐらくみさく　亀　庵の堵

狗もつまふて　能毋の住居

ふゝのるまて　遠き不一　旅立なぐ　ゐる内

まゝ入ゝ体附合よや

ゐらひのわるゐ　ゐをゐる僧

冬枯のれ手毋をしむ　おお要夜ひ

寺などれさぐくよや

間が面手バ又見たくな体旅の旅格

ともに　よるゝ　逢　坂乃板

いりぐならむ解し　ゐず

おふちかけ亀　ゐおの　面ゐぶれ

燥　萱を目利のうちよ　片身く

上ふ回し

かけ鮒の布袋のゐに月片て

ゐるのやいとふ　ゐめぐんなく

百とゝろの袋ふ日も凡むくひたるうみもの
布袋の顔に月もけしそめ〳〵をもゆる出たら
むたゞやいとよさゞ〳〵れるくとゝふをうしの
附合之
かちゝゝ石ハ舟を先ひぐ法なり
夏虫山ハのさらだ花の咲拙ひ
阿ゆのまゝ之
美殿のさゞ凡の中乃大口ひ
ふゝろのふ称宜も宿ふ下ゆし
祈るなどよや



面新ふうちかゞ〳〵しる之ゝちハ
雲雀ふけちばや　恢白も屏風の画之
るどもらゞ倍る赤を阿らそひて　美和の紋
ともふ和の凡ハ家の阿るじたらむおの凡つ
たゝらむと阿らそいて乃美和の宮紋を
もうちけせるどのゝしゝ体ちまの附ごろハ美
みゝく左ごろよハ伯夷叔齊が併も阿るべし
猪えふ下知の烏帽子をかゝぶ凡し

幕を去ぶれハ皆人衆をとる事
おこたなし
垣越ふちよつと盥の礼つゝみて
當清のうちハ小屋で火を焚
濡れ盥をかわるハ當清の引きと見
くつけるこ
彼岸のぬくもりにてかゝる
青せいハさをふもえそつきたるの花
南都春色目前
上下の格乃高くる川のきる

うゝ田の中故ハ路乃ハたにつく
潴水場のりしたの田の中も水ハのふれ路の不を
はしなるべし
枝一本故乃のわきぶし
雲鳥ハたるれまも紐ハぬらされて
ぬるなれ旅でろハ枝ひとつを乃のわき
ぎしもたのこゝたぐりゆうハ地鳥の幸
ふも深とぶれむまことに家中の情奉
ぶし

芭蕉翁附合集評注下巻終

芭蕉翁七書

行脚掟　二十五条　十六篇　句合
嵯峨日記　奥の細道　發句集
右七部合刻　小本　二冊

蕉句三傑集

曉臺　闌更　蓼太　中本　二冊
右三大人一代發句抜題ヲ集む

俳諧發句三玉集

麥林　希因　柳孔　小本　二冊
右三家發句集

文化十二年乙亥正月發兌

大阪心齋橋通久宝寺町
俳諧書林　河内屋嘉七